方正友好交流の会 会報 17 号 2013 年 12 月刊

里大方正

~燎原の火は方正から~

安倍さんも方正に行きなさい!

一日本人公墓を参拝した丹羽宇一郎さんに、9月18日会う一

「開拓」、心の底に

草の根交流が一番大事だ一日本人公墓と日中交流を考える一

「満蒙開拓平和記念館」開館から半年を経て

鎮魂と平和の里―阿智村の満蒙開拓平和記念館を訪ねて―

大類 善啓

澤地 久枝

宮本 雄二

寺沢 秀文

山田 敬三



大使離任前に方正を訪れ、日本人公墓を参拝された丹羽宇一郎さん

なぜ方正(ほうまさ)なのか?

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒龍江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』(せいかほうまさ)なのか?

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、 やがて「燎原の火のように方正から平和と人類愛的な友愛の精神が広まるのだ」という意 味を込めて会報の名前にした。

星火方正 (第17号) ~燎原の火は方正から~

目 次

安倍さんも方正に行きなさい! 一日本人公墓を参拝した丹羽宇一郎さんに、9月18日会う一	大類 善啓	1
唐家璇・中日友好協会会長への手紙	方正友好交流の会	10
「開拓」、心の底に	澤地 久枝	11
草の根交流が一番大事だ一日本人公墓と日中交流を考える一	宮本 雄二	14
日中戦略的互恵を支え留学生交流	II	34
「満蒙開拓平和記念館」開館から半年を経て	寺沢 秀文	37
鎮魂と平和の里―阿智村の満蒙開拓平和記念館を訪ねて―	山田 敬三	42
日本国長野県「満蒙開拓平和記念館」訪問レポート	石 金楷	45
叔母家族の終焉の地を訪ねて	中嶋 定和	50
あの頃のこと	福井 以津子	53
映画「祖国をひと目みて死にたい」	奥村 正雄	56
ハルピン氷祭り、詳細ともう一つの意味	II	59
* ハルピン氷祭りの旅(2014)	方正友好交流の会	60
*「満蒙開拓平和記念館」を訪ねる―1泊2日の下伊那の旅	"	61
久保孝雄氏の新著『変わる世界、変われるか日本』を推奨	凌 星光	62
方正日本人公墓とは何か	大類 善啓	64
――「方正友好交流の会」へのお誘い――	編集部	67
書籍案内 報告 編集後記		68

安倍さんも方正に行きなさい!

日本人公墓を参拝した丹羽宇一郎さんに、9月18日会う

本誌 大類 善啓



丹羽宇一郎さん(撮影:大類)

初の民間出身の中国大使として北京に2年半 駐在した丹羽宇一郎さんは、離任する前の昨年 11月17日、かねてから思いのあった方正日本人 公墓を参拝された。

中国に赴任された大使にはその都度、必ず『星 火方正』を送っている。丹羽さんにも 2010 年 6 月に赴任されてから送った。驚いたことに北京 から返事があった。便箋にペン書きである。中 国大使という大変忙しい業務の間をぬって書か れたと思うと、とても嬉しく、同時にとても律 儀な方だと思った。

その手紙には、我々の会へのねぎらいと、そ して中国の東北へ行ったら必ず方正に行き、公 墓に参拝しますと記されていた。

その後、ハルビンなど東北へ行かれ、中国人養父母に感謝状を渡されたという新聞記事は目についたが、方正行きの報道はなかった。ハルビンから方正に行って帰ってくるとなると丸1日がかりである。超多忙の要職の身には、やはり方正へ行くのは無理だったか、と思っていた。そして離任のニュースが入った。やはり公墓参拝は実現できなかったんだと思った。

ところがそうではなかったのだ。離任され帰国されたが連絡先がわからず、しかし知人が丹羽さんにお会いしたと聞き、連絡先を教えていただき手紙を書いたら、すぐにまた返事が届いた。そこには離任する前に方正に行き、公墓を参拝したと書かれていた。そしてぜひお会いしましょうとのことで、お互いに日程を調整した結果、9月18日に丹羽さんの事務所でお話しすることができたのである。

60年安保闘争の闘士だった丹羽さん

会見する前に最新の著作『北京烈日』を読み、他にも文庫本にもなっている丹羽さんの何冊かの著作に目を通した。その一つ『人は仕事で磨かれる』(文春文庫)の第2部、「決断する力を養う」という自伝的な文章を読んで驚いた。

丹羽さんは高校時代には新聞部に所属し、名古屋大学法学部の在学中は持ち前の正義感から学生運動に入っていった。時は 60 年安保闘争の時代である。丹羽さんは全学連主流派の活動家として自治会の委員長になっていた。全学連主流派は、日本共産党と決別して結成されたブントと呼ばれた共産主義者同盟の影響下にあった。

6・15の国会占拠闘争の時、丹羽さんは名古屋の集会で演説をした。地元の新聞やテレビにも丹羽さんの姿が報道され、親は驚いたという。逮捕は必至。しかし委員長を逮捕させないという仲間の計らいでなんとか近くにあった中日新聞社に逃げ込んだ。そこは夏休みにバイトしていた勝手知ったる場所である。「助けて」と飛び込んだら、「いいよ、いいよ。ついでにこれ見てよ」と校閲の仕事をタダでやらされたという。

アイザック・ドイッチャーの『武装せる予言者・トロッキー』を原文で読み、書棚には 『レーニン選集』や『マルクス=エンゲルス選集』などが置いてある。卒業論文はトロッ キーだったと著書に記してある。

丹羽さんよりこちらの方が一世代若い。丹羽さんのような優秀な頭を持ってはいないが 自分となんだか若い時の軌跡がとても似ているように思え、たちまち親近感を持ってしま った。

手紙は3度ほどもらっているが会うのは初めてである。しかし、こういう学生時代の丹羽さんを知っていたので、まるで他人のような感じがしない。なんだか、高校時代の先輩のような感じを持ってしまい、まずそんな話題が自然に出てきた。

60 年安保闘争の輝かしい闘士の名前を出しながら、よくぞ大商社である伊藤忠商事に入れましたね、と聞いた。

これは前出の文庫にも書かれているが、1961年7月1日の就職解禁日の日がまた伊藤忠の試験日だった。そのことを教えてくれた友人たちと一緒に試験を受けたところ、友人たちはみんな落ちたが、どういうわけか丹羽さんだけ受かったという。初めて伊藤忠の名前を聞いた時、「いったい何をする会社だ?」と思ったと記している。

伊藤忠商事にかつて勤めていた私の周りにいる友人知人に聞いてみれば、伊藤忠商事に はなかなか、おおらかなところがあったようである。

方正行きを止めた黒龍江省政府

さて閑話休題、本題の方正行きについて聞こう。

「日本人公墓については、送られてきた『星火方正』を読みまして、<へぇ>という感じで<これは行かなくていけない>と思いました。これはあまり他では言っていないんですが、去年11月中旬に方正に行ったんです。当初、ハルビンの黒龍江省外事弁公室からは来ないでくれと言われました。大使の行動は、何かあったら困るので必ず、中国側に事前に連絡をしなければいけないというので黒龍江省に連絡をしたところ、<セキュリティ上、問題があるから止めてくれないか>と言われたんです」

2011年夏、日本開拓民亡者名録」なる石碑を建立した方正県政府に対して中国の「愛国

青年」たちが「開拓団は中国の土地を奪った侵略者だ」と騒ぎだし、石碑に赤いペンキがかけられる事態に発展し、県政府はすぐに石碑を撤去した。また 2012 年 9 月以降当時は、 尖閣諸島の<国有化問題>で、日中交流のいろいろな行事がキャンセルされていた時期だった。県政府は神経質になっていたのだろう。

丹羽さんは、1回目は断念せざるを得なかった。しかし帰国する前の2012年11月17日、改めて方正に行くことを決めた。

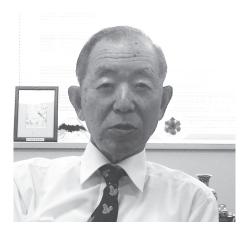
「大使を辞めて帰国するとひょっとしたら、もう中国へは来ないかもしれないと思いました。しかし、日本の方々の遺骨が方正日本人公墓に 5000 体ぐらい埋葬されているので、これはやはりお参りしてから帰国したいと、また黒龍江省に電話をしました。しかし省政府はまた、来ないでくれと言いましたが私は、<その話は聞かないことにしよう。だけど自分の意思で私は行く>と言いました。自分の気持ちですから、北京駐在の記者にも本省にも知らせず、方正に行きました。もうたいへんな吹雪で道路は凍結していました。帰りは雪が積もり、風が吹き、高速道路は大事故ですよ。その中を帰ってきたんです」

丹羽さんは、「リスクは自分で負う」と決意、黒龍江省政府の要望を断り、秘書一人を連れて方正に出かけた。方正に着けば、県政府から役人が二人出てきてくれた。

安倍さんも方正に行ってほしい

参拝されたときのお気持ちをお聞かせください。 「うーん・・・やはりそりゃ重みがありますよ。

5000 人ほどの日本人の遺体が葬られているわけですからね。皆さん、どういう環境で亡くなられたのか。まぁ一概には言えないんだろうけど・・・いろんな方がおられるんだろうけど、みんな死にたくて死んだわけじゃないでしょう。日本政府も、こういう異郷の方正で亡くなった人のこともきちんと大事にしなきゃいけない。中には生き残って中国の養父母に育ててもらった人もたくさんいますよね。ハルビンを訪問するたびに、そういう人にもできるだけ僕はお会いしています。そうすると、養父母の方がく皆さんが我々を忘



丹羽宇一郎さん(撮影:大類)

れないで見てくれたことが嬉しい>と言われます。そういう方々に感謝状を渡しました。

安倍さんもごちゃごちゃ憲法などをいじらないで方正に行ってほしい。お参りしてほしい。方正に日本人公墓があることもご存知ないのでは。仮に知っても参拝は難しい。右よりの勇ましいことを言う人に限って、公墓に参拝するというような気持ちがない。政治家の皆さんもそれなりの気持ちで方正に行ってほしい。別に右も左もない、遺族に対する気持ちです。参拝するのは靖国だけじゃないですよ。本当の戦争の犠牲者ですからね 中国政府もえらいですよね、ちゃんと日本人公墓を維持してくれているんですから」

丹羽さんは、方正地区日本人公墓、麻山地区日本人公墓の他に、中国養父母公墓、藤原 長作紀念碑をお参りされたが、それらを囲む中日友好園林では現在、日本人の参拝は許さ れているが、お線香はいけない、お花をあげることもお経もあげてはいけないような状況 にあると筆者の方から説明すると、それはおかしいと言われ、程永華大使に言ってみよう かと秘書に連絡を取るよう指示された。

筆者が別頁に掲載した中日友好協会会長の唐家璇さんに手紙を出したことと、撫順戦犯 管理所での日本人に対する処遇について話すとこう言われた。

「周恩来総理はえらいですよね。戦犯に対する態度などは、思想を超えてやってほしいですね。本来から言うと、日本が本当はお墓を作ってやらなければいけないのでしょうが・・・・黒龍江政府にやってもらっているというのは、なんとなく忸怩たる思いがありますね」

丹羽さんは大使時代、黒龍江省だけでなく各省に行き、養父母がいるとお会いになっている。養父母に育てられた<孤児>も今では70歳を超え、中には北京で会社の顧問に処遇されている方もいる。そんな人にもお会いになっている。

「中国人はえらいですよね、そういう方を育てて大学まで出して養育する。ほとんどの方が本当の子供と同じように育ててもらっている。しかし<日本人>だということで苦労されていますよね。しかし、方正県から日本へ来て日本人のお嫁さんをもらって中国へ帰ったりする方もいるようです。日本人もお嫁さんは中国の東北からもらいたいという話もあるようで、政府同士は今悪いかも知れないが、現場の日中の庶民同士はいろいろ交流をしてうまくいっているんですよ」



中国養父母公墓に参拝する丹羽さん (写真提供:丹羽事務所)

中国在住の日本人の声は日本に届かず

丹羽さんは<東京都が尖閣諸島を購入する>と石原慎太郎が発言したことについて、英紙『フィナンシャル・タイムズ』のインタビューで、「実行されれば日中関係に重大な危機をもたらす」と日本政府関係者としては初めて、反対の意思を明らかにした。

ところがこれが丹羽バッシングを呼び起こした。しかし北京にいた日本人ビジネスマンなどからは「よくぞ言ってくれた」という声が多かったという。

「中国にいる日本人はほとんどの方がそう言っていました。なんで貴方が怒られるのかと。新聞記者の方も含めてです。日中が国交を回復するとき 尖閣諸島を持ち出すと、共同声明は成立しないというので周恩来総理は今回取り上げるのを止めて先延ばししようと言いました。鄧小平さんも後の世代に任せようと言った。田中角栄さんもそう言ったというが、その記録が削除されたわけです。当時の橋本恕課長が削除したと自分で言ったと矢吹晋(横浜市立大名誉教授)さんはそう書いた(注:矢吹著『尖閣問題の核心―日中関係はどうなる』)わけですが、それに対して誰も反論していない。

それを石原さんは破るわけです。中国政府が、石原が言っただけならいいけど、それを 日本が言った通りに計画通りやればね、それは今のようなことが当然起こるわけです。

すべてがひっくり返るわけです。 4 つの政治声明とその精神がひっくり返るわけです。 もっと慎重にやるべきなんです。だからと言って別に、領土が向こうのものだこっちのも のだとかいう結着じゃないんだから、だから今やる必要はない。まぁ常識で考えてもそん なことを慌ててやるのかということですよ。 尖閣諸島には誰も住んでいないし、誰もそこ で怪我するわけでも殺されるわけでもない。 日本の国益にも中国の国益にも資源以外まっ たく関係はないんですね」

丹羽さんの「実行されれば日中関係に重大な危機をもたらす」という発言は北京の日本 人の中では違和感なく受けとめられた。北京駐在の日本の新聞記者たちがそんな丹羽さん の発言を裏付けるような記事を送ろうとしたが、しかし東京本社はそれを歓迎せず、<反 日デモで中国人が怒っている>といった記事を求めたようである。

日本政府に迎合的な大メディア

「日本政府は僕を批判しているわけです。そんな僕を批判しているような記事の方が新聞に載せやすいということです。僕を批判しているような記事を求めていたんじゃないですか。僕は<勝手にやれや>というぐらいの気持ちでした。誰が考えたって事実は事実なんだから、そんなことをやると本当に大変だよと言っているに・・・。僕が言ったのは(尖閣を購入するということ)そんなことになると大変なことになるよと、気をつけなさいと言ったんであって、あれは日本の領土じゃないとか中国の領土とか一言も言っていない。それを勝手に解釈する。解釈する方がおかしいんです。

中国にいる駐在の記者はしっかりしていても、日本側(日本の本社)が政府に迎合的な雰囲気でいろいろ書いていたんじゃないですか。気持ち悪いよね。知的頽廃です。

まぁ、いろんな人がいるからね。それをまた、一部だけ取り上げるんでしょうね。まるでそれが日本全体のような雰囲気なんだといろんな国に報道してしまうという責任を、メディアはもう少し考えないといけないですね。日本人はみんなあんなふうな意見を持っているのかと思ってしまいますからね。

どこの国でもいろんな人はいる。中国だって全部が反日じゃない。しかし総じて、中国 もそうかもしれないが日本も政府の顔色をうかがって、学者も官僚も経済界も動いている。 中国は政府が「コラッ!」って怒るけど日本は「コラッ!」と怒らない。しかし、政府の 顔色を伺って動いている。知的頽廃ですよ。

今日はまさに9月18日、<満洲事変>の日ですよ。でも、そういう事実すら新聞は書かない。

実は私もそう言われるまで忘れていた。丹羽さんとの会見のこの日が9月18日、関東軍の謀略による柳条湖事件勃発の日だった。

侵略した過去を忘れがちな日本

かつて瀋陽郊外にある9·18歴史博物館を訪れたことがある。そこには江沢民が書いた「9· 18 を忘れるな」という大きな文字が記念館の正面に刻まれていた。

――周恩来総理や陳毅外相は当時、訪中した日本の文化人らに<我々は過去の侵略された辛い時代を忘れたいと思う。しかし日本が忘れないというなら、これは素晴らしい。しかし我々は忘れないと言い、日本側が忘れてしまうなら、これは悲劇だ>と言いました。こういう周恩来時代、そして江沢民時代、そして現代の中国をどう見ておられるでしょうか?

「今と 40 年前では違う。周恩来は国内の反対の声を抑えて賠償を放棄しました。田中角 栄も相すまないと言った。しかしいつの間にか 平和ボケになり緊張感を失って、だんだ んお互いにわがままを言うようになって今になって来ました。日本と中国は住所変更がで きない間柄です。仲良くしなければ両国民もお互いに損ですよ。両国民もいずれ元に戻り ますよ。何十年も喧嘩はできません」

――周恩来は、軍国主義者と日本人民を区別しました。中国の国民に対しても日本政府 と日本人民を区別すべきだと一生懸命教育しました。しかし今は違って、日本政府が悪い となると、日本人は全部悪いというふうになってしまっている・・・

「中国というのは日本と文化が違いますでしょ。大罪というか、責任者の罪は許さないんですよ。何百年も許さない。だから日本の戦争責任者は誰なのか―日本をこういう侵略戦争に引っ張ってきたのは誰なのかということについて、日本はその責任者を簡単に許す。しかし中国からすれば、貴方たちはそんなに簡単に許すのか、そう言いたいのでしょうね。そういう理解だと思います。文化の違いがあるのでしょうね。

日本は責任者であろうと誰であろうと、死ねば禊ですからね。まぁ終わったじゃないかと、もういいじゃないかと。孫の代、曾孫の代まで言う事ないでしょうとなる。中国は何 百年経っても許さない。そこのところが文化の違いとしてあるのでしょうね

日本人として見るとくもういいだろう>と言う事になるけど、中国として見れば、戦争 責任がないなんて言うのだったら、それじゃ我々中国は立つ瀬がない。我々は何なのだと いうことになるでしょうね。加害者である日本、<満洲事変>以降の戦争では、日本が敗 戦国になるわけです。だからその辺は、中国の立場を考えて言動に気をつけないといけな いでしょうね」

戦争はいかんというのが歴史認識だが、知的衰退が進む日本

――丹羽さんの言葉の中に<今の日本の対話能力の無さは、心の衰退、精神の衰退に繋がる>とあり、非常に頷くところがあります。

「知の衰退ですね。なんと言うのでしょうか、日本は歴史から学ぶということがないですね。歴史は国によって違うんです。事実関係で見れば誰が見ても<何月何日に何があった>、<柳条湖事件は起きました>と、これは誰が見ても事実です。それをどう位置付けるかが歴史です。歴史というのは国によって違う。被害国か加害国では、その事象一つをどう解釈するかで違う。歴史は His story で、Who is he? 誰が書いたのか? というと、与党とか強い者の歴史なんです。中国共産党の歴史は、日本人にはとても認められない、中国共産党がいかに正しかったかを書いているわけです。

日本は逆に自分の現代史を書こうとうすると、自分の先祖をくあいつらはね、とんでもないことをやったんだ>と懺悔しなければいけない。戦争責任があるという歴史を書かなきゃいけなくなっちゃう。だから、もう少し時間が経たないと現代史を教えない。教えられない。

ソ連はソ連の歴史、Who is he? ロシアはロシアの共産党の歴史を書く。アメリカはアメリカでジョージ・ワシントン以来の支配者の歴史を書く。非支配者の末端の貧乏人は歴史を書いたことはない。日本の国民も、軍事指導者の歴史は現代史にあるけど、それに関与していない被害者や弱い人の歴史はないですよ。

当時、特高にいじめられたとか、思想犯で検挙されたとかいう人の歴史は、歴史書には書かれない、ということですから、歴史認識といってもその国々によって歴史の捉えられ方は違う。中国の国の歴史を私どもが「あぁそうですか」と、言うふうには言えない。日本人から見れば間違っているかもしれない。歴史というものはそういうものです。

しかし共通しているのは、戦争というのは弱いものが被害を受けるわけで、戦争はいかんというのが共通の歴史認識です。不戦の誓いを各国が持つことが指導者の歴史認識なんです。各々の歴史的事象についてはどう位置づけるかはそれぞれ国によって違う。しかし共通として言えること、『教訓としては二度と戦争はしない』、不戦の誓いが歴史認識だ。それがいま日本は薄らいできている。中国もなんとなく薄らいできている。そういうとこ

ろに問題があるんじゃないでしょうか。

だから両国の首脳が不戦の誓いをする。それが歴史認識の共通したところですよ。だから日本だけが歴史認識が間違い、というよりも各国の首脳がそういう歴史認識をもつことだね、そして話を始めないと。日本と中国が話し合いをしましょうと言っても、片や戦争も辞さない、相方が二度と戦争を起こしちゃいけないと言うんじゃ、これは話にならない。

そこのところが日米もひょっとすると、間違った、ミスマッチになるかもしれないね。 そうすると日本だけが集団的自衛権とか憲法改正とか言っていると、アメリカの認識と違うかもしれない。そうするとなんとなく日米も波風が立つかもしれない。日本だけがなんとなく右の方に行くとなると日本は孤立するかもしれない」

お互いに知り合うことが大事だ

――いまの日本の政治家は若い。戦争を知らない。中国もそうかもしれないが。

「中国の今の指導者たちは、抗日運動を語り続けています。これはある程度、江沢民がやったというより、日本軍に勝ったということは彼らの歴史ですからね。日本軍に勝ったということは日本をやっつけたということですからね。日本はいつも悪者なんですよ、彼らの現代史では。満州事変から攻め込んで、自分の親類の連中を刀で刺して、女も子供もメチャメチャに殺した。それは何人か?という問題ではないんですよ。戦争に対するつらい思い出があるわけです。日本人をいじめるということよりも、やはり中国の今日あるというのは日本人に勝ったお蔭だという歴史認識があるからなんでしょう。そこのところが日本と中国は交わらない。そういうところは誠に残念なことで、〈深く反省している〉というようなことを日本は言わざるを得ないでしょう。

現代史はね、日本は語れないんですよ。さっき言ったように、ストーリーをどう教えるか、今は未だ語れないんですよ」

----しかしドイツは、ちゃんとナチスのことを教えています。

「日本の近現代史が全部悪いというわけでない。戦争については、日本にもいい分はある。だけど、当時の日本としては日本だけでは食べていかれない。資源を求めて外に行かざるを得ないという部分、植民地時代の<資源を求めていく>というのがあったけど、だからと言って無茶苦茶やっていいというわけじゃない」

――石橋湛山はかつて<小日本主義>を唱えて、満洲を引き上げた方が国家経営から見てもいいと発言したけど無視されてしまいました。

「軍が独走して戦争になったというストーリーになるんじゃないでしょうか。相手にとんでもないことをした。大変な迷惑をかけたということは教えなきゃいけないでしょうね」 ―― 丹羽さんは、商社のビジネスマンとして長年ニューヨークに駐在され、また中国にも何度も出張されていました。今回の2年半の中国大使の体験は、今までの人生の中でどう位置づけられるでしょうか。

「日本と中国は基本的に仲良くしなきゃいかんということです。大使時代はチベットも

ウイグルも回りました。どこへ行っても<人間は自分の鏡>ですよね。自分がそういう気持ちになれば相手もそういう気持ちになる。自分が相手をこの馬鹿がと思えば、この人は俺を馬鹿にしているとわかるわけだ。そういうことがないように、お互いやはり気をつけなければいけない。しかも我々は仕事で隣の国にお邪魔しているわけだから。お邪魔しているときに土足で畳に上がって仕事するわけにいかんでしょう。中国にお邪魔するんだから、それなりに礼儀を尽くして、中国のルールにのっとって正々堂々と仕事をして金を稼いでくればいいんでね。そういう気持ちを持つことが大事だということを確認してきたようなもんです。そういう気持ちを日本の人に持ってもらいたいから、親中派でもなんでもなくて、日本の人がどんどん中国へ行って、また中国の人がどんどん日本に来て、またお互いに70年前の日本人や中国人じゃなくて、今の日本人や中国人がどういう考えをもってどういう生活をしているか、お互いに知り合うことが大事でしょうね。仲良くしなきゃね。喧嘩をしたって何も意味がないですよ」

大使を辞められたが丹羽さんは今でも講演などでお忙しい。最新の著作『北京烈日』の 印税を全部、中国人留学生に対する奨学金にするようにされ、すでにその選考は外務省を 通じて大学の先生方で行われている。次に出る本もそのようにするとのことだった。

「中国のあちこち回ってみると、日本で勉強したいという若い人たちがいる。いろんな 人に日本を知ってもらわなければいけない。それが友好の一番いい運動ですからね。奨学 金を出して勉強してもらう。そして帰ったら日本びいきになる。そういう地道なことを続 けることがとても大事です」



中日友好園林の正面前に立つ丹羽さん(写真提供:丹羽事務所)

<にわ・ういちろう: 1939 年 1 月名古屋市生まれ。1962 年伊藤忠商事入社。1998 年社長に就任。多額の負債を抱えていた会社を 2001 年 3 月、過去最高の 705 億円の黒字を計上するまでに回復させた。会長就任後、2010 年 6 月中国駐在の大使に。2012 年 12 月退任>

唐家璇先生

唐先生におかれましては日々、良好な日中関係継続に努力されております。ここに改めて敬意を表する次第です。

現在、日中の政府レベルでは厳しい状況が続いていますが、民間レベルでは、幅広く且つ、深い友好交流が衰えることなく盛んであります。

しかしここにきて、長年日中友好運動に携わってきた日本の古い活動家の中から、周恩 来総理が常に語り実践して来た「日本の軍国主者と日本人民とは区別する」という周恩来 総理の教えが中国では忘れられているのではないか、と嘆きの声が出てきております。

周恩来総理は常に、「国際主義的な精神」を忘れずに行動され、また中国人民に、日本政府が間違っていようが、日本人民との友好交流は別なのだと力説されました。

その周恩来総理が英断を下されて、ハルビン市郊外の方正県に「開拓民」たち日本人の 公墓が建立されています。ソ連の参戦、日本の敗戦によって流浪の民と化した「開拓民」 たちは、方正で 5000 人ほどが伝染病や飢餓で死亡しました。「開拓民」とはいえ、中国か ら見れば、侵略者の家族たち、婦人や子供、老人たちです。

1963年、中国で食糧危機が起こった時、中国政府は人々に食糧を確保するために荒地を開墾し畑にしてもいいという布告を出しました。方正県に残留した日本婦人の松田ちゑさんは、友人とそのために奥地に出かけたところ、累々たる白骨の山を見つけたのです。

それこそ 1945 年の秋から翌年の春にかけて亡くなった日本人たちの白骨です。松田ちゑ さんは、なんとか自分たちで埋葬したいと県政府に申し出たところ、その願いは黒竜江省 政府を経て最終的には周恩来総理に届きました。周総理は、彼らも日本の軍国主義の犠牲 者であるということで日本人公墓の建立が許可されました。

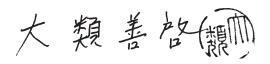
寛大な中国人民の心を現わす日本人公墓の存在を知った日本人民は、深い感動を覚えました。しかし現在、参拝に訪れる日本人が中日友好園林に入り公墓参拝は許されても、線香やお経をあげることはできず、また写真撮影もできないと県政府から言われ、日本人参拝者たちは嘆き悲しんでおります。

周恩来総理はかつて、撫順戦犯管理所の中国人職員に対し、収容された日本人の戦犯といえども彼らの民族的な生活習慣は尊重するようにと指導されました。

同じように、亡き死者を弔う時の日本人の習慣や習俗は尊重されるべきだろうと思います。中国人民の包容力ある心をいま一度示していただければ、日中両国人民の友好交流は 更に深まることになるでしょう。

唐先生の高い心ある対応をお願いする次第です。

7月22日 方正友好交流の会 事務局長



「開拓」、心の底に

澤地 久枝

1981年といえば、遠いむかしのことになった。わたしが五十一歳のときだ。その年の夏、わたしは反満抗日ゲリラの最期のリーダー楊靖宇(1905~1935)の事跡をたどって中国を旅した。

1ヶ月あまりの旅で濛江県靖宇鎮をたずね、ゆくさきざきで、新中国成立後、はじめて訪ねた外国人といわれた。

わたしの心の底には、敗戦後の旧満洲での難民生活と引揚げを、それを被害者の視点で受けとめたくないという決意めいたものがあった。そして、文章を書きはじめてようやく十年というとき、かつて馬賊とか匪賊とよばれた人たちの最期の地へゆこうと考えた。

『満洲共産匪の研究』という本があって、この本は、日本と向き合った中国人の闘争を書いている。昭和十一年の時点で「全満約二万人」の賊を討伐するのは「絶望」と書かれている。

この本に出会って、日本人には見えないところで武装闘争をした人びとをはじめて知った。追いつめられた最期のリーダーが、楊靖宇であった。その死の場所へ行こうとひそかにきめていた。

一九八○年秋、北京の中国作家同盟の代表たちとの会食の席上、わたしはかねての思いを明かした。その場で、「いつですか」ときかれて、「来年」と言ったときには、根拠もなくなんの自信もなかった。しかし「それでは、われわれも準備しましょう」という言葉が実現し、八一年夏の中国旅行になった。

北京で、反満抗日軍生きのこりの将軍に会った。会話の前後に、「ファンチョン」とその人はくりかえして言い、日本から同行した通訳はこの言葉につまずいた。

「方正?」とわたしが言ったのは、カンのようなものだ。『共産匪の研究』に、拠点として「方正」の文字があった。メモに書いたわたしの文字に将軍はうなづき、「あなたはファンチョンへ行きなさい」と言った。

抗日匪の拠点としての方正がわたしの頭にあった。その土地は「カンナンシンク」の 思い出の土地であろうと・・・。しかしその後、わたしには方正を訪ねる機会はなかった。

今年四月、「朝日新聞」の"ひと"欄で寺沢秀文さんを知った。長野県阿智村に「満蒙開拓平和記念館」が発足したという。

開拓団にはこの七十年近く、ひそかな思い入れを抱いてきた。電話で確認すると、新 宿から高速バスで四時間、ついでタクシーといわれる。阿智村は靖宇鎮よりも遠い気が した。 しかしある日、わたしは意を決して出かけた。飯田市がいかに遠いかをはじめて知った。誰とも口をきかず、長い時間だった。

開拓団へのこだわりは、書物で知ったからではない。昭和十六年ごろ、父に連れられ、 吉林市から列車で拉法へ行った。父の友人をたずねたのだが、そこが拉法開拓団だった。

その日、視野いっぱいに無数の赤トンボがとんでいた記憶はずっと残った。このときはほんの子供で、「満鉄」の下級職員であった父と友人とのかかわりなど考えてもみない。 先方は小さな子どものいる家族だったと思う。

さらに昭和二十年六月十日から七月十日までの一ヶ月、当時の女学校三年生だったわたしたちは学徒動員され、行ったさきが「水曲柳」開拓団だった。

吉林から水曲柳は直行の鉄路はなくて、拉法で一度おりている。ふつうなら忘れてしまうところを開拓団と拉法とがひとつになり、わたしのなかにのこっていたと思う。

水曲柳では土塀にかこまれて、四、五軒の泥の家があった。わたしたちは二人ずつにわけられて一週間ずつ家庭に入った。

男手のことごとくが「根こそぎ動員」で召集され、女子どもだけの生活だった。 鋤で地面をかく。長い長い畝一本をかくと昼御飯で、向うの丘がひどく遠かった。

この開拓団体験と、八月九日のソ連開戦、吉林以北の人たちの避難開始の報に、わたしは 女子どもの開拓団の多難を予想した。あの果て知れぬ大陸の突然の避難行で、誰が無事に目 的地へ到達できようかと思った。

冬が来る頃、痛ましいニュースがあいついだ。集団自決と聞いて、ほかには生きる道なし とわたしは思った。ソ連の参戦がずれれば、それはわたしが直面した事態であった。

開拓団暮しは電気も水道もなく、井戸とオンドル、夜はカーバイトを短時間燃す生活である。離れた場所に、中国人集落があった。

その後、わたしは自分が生きたかも知れない「運命」とひそかに思いながら、開拓団を思 う人間になった。

もう一つある。

敗戦の翌年春、わたしはかつての吉林高等女学校、敗戦後難民収容所となって、死者があいついだ建物を右手に、ぼんやり歩いていた。前の方、つまり吉林駅のある方向から、三、四人がゆっくりと歩いてきた。

外出するのはおとなばかりなのに、すれちがったとき、それが少年たちであることに気づいた。髪の毛が全部抜けて、金色の産毛のようなわずかな毛が風にそよいでいた。

満蒙開拓義勇少年団の生きのこり、とわたしは直感した。どれだけの人数が死んだか、誰も記録など残していない。十四、五歳の少年たちが、負いきれない人生の重荷を背負い、ようやく避難所まできて、さらに多くの少年たちが発疹チフスで死んだ。

高熱と栄養失調を辛うじて生きのびたわずかな少年たち、その少年たちだった。なにも話などしないが、彼らの着衣、髪、雰囲気がそれを語っていた。そのとき、加藤完治は生きてはいられないと十五歳のわたしは考えた。満洲へ送り出した責任者は、その責任をわが一身

に負わなければならないと思ったのだ。

まだ五味川純平氏の「戦争と人間」の助手をしていたとき、生きのこった満蒙開拓青少年団の生きのこりが、思い出をまとめて自費出版したことを知った。今回、書庫でさがしたがみつけられなかった。「あゝ清渓」というタイトルだったと思う。内容のくわしい記憶はもう消えた。

開拓団のことを考えるとき、女たちの受難と、少年たちを思わずにはいらない。それはほんの子どものようであった日々に、わたしに刻みこまれた。

満蒙開拓平和記念館はわたしの予想を裏ぎるほど立派な建物であり、よく資料をあつめてあった。日本人の「満洲」体験は、中国人からみれば侵略であり加害を意味する。しかし日本人の歴史をわたしたちが考えるとき、そこにかくしようもなく、「棄民」という言葉が浮きあがる。

国策で開拓団・移民を押しすすめ、敗戦により政治が破綻したとき、日本の政治は、国外にいる女子どもの運命を無視した。自決し、殺され、栄養失調という飢えで死んだ人たち。生きのびる道をまったくとざされながら生きのびたいのち。避けがたい運命と向きあうのを、政治家も官僚も(もちろん軍の責任者も)無視した。国会の決議のなかに「現地で生業をつづける」というものがある。わたしは何十年たとうとも、開拓団の運命を思うとき、いきどおりを禁じえない。

女子どもがどのように生きのびたか。満蒙開拓平和記念館がすすめる事業、その証言(ききとり)は貴重である。いまはじめて語られる受苦の歴史を無視してはならない。

くさわち・ひさえ:1930年東京生まれ。両親と共に「満洲」に渡り、敗戦で引き揚げる。中央公論社勤務を経てノンフィクション作家に。著者に『妻たちの二・二六事件』『密約―外務省機密漏洩事件』『昭和史のおんな』『火はわが胸中にあり』『もうひとつの満洲』など多数。九条の会発起人の一人>

草の根交流が一番大事だ

~日本人公墓と日中交流を考える~

宮本 雄二

≪解説:宮本雄二さんのこの講演は、今年の2013年6月1日(土)午後行われた方正友好交流の会・第9回総会のものである。宮本さんは2008年1月10日、日本の大使として初めて方正にある日本人公墓を参拝され、また日本人孤児を育てた養父、当時94歳の魯万富さんに会い感謝の意を表された。この原稿の後に掲載したのは、宮本さんが日中関係学会で発表されたものである。当日の総会で配布した≫

私は2008年1月10日に、皆さんがよく行かれている方正日本人公墓に行って参りました。 本当に寒い時節で、ちょうどハルピン市で氷祭をやっていました。

日本人公墓の大地に立ってですね、頭を垂れながら、深く感じるところがございました。 そういうことを踏まえて、今日は皆さんに私の気持をお伝えしたいと思います。

「決して最後までその職場を離れてはいけません!」

私は1969年4月に外務省に入りました。三ヶ月間、外務省の研修所で主として言葉の勉強をやるわけですが、7月から一年間、アジア局中国課というところで実務の研修をして、それから台湾に中国語の勉強に参りました。



その一年間、実務研修をしておりましたときに、中国語を話す諸先輩方に接する機会がございました。皆さん、戦前、中国で中国語を学び、あるいは中国で生活をした、そういった方々ばかりでした。戦後生まれの私からすると、そんな諸先輩方との交流は、大変、勉強になりました。

その中に、大畠和子さんという 方がおられました。1950年か52

年だったか、戦後、女性が社会に進出すべきであるという社会の大きな潮流のなかで、7人の女性の方が外務省にお入りになって、"7人の女サムライ"などと言われていました。そのなかの一人が、大畠和子さんで、中国語ということでお入りになりました。旧姓を吉村といい、お父様は旧陸軍士官学校出身の軍人さんで、最後は中将までおやりになった。しかしながら、敗戦となり、そのときはすでに現役を退いていたのですが、軍人として戦

争指導に責任があったということで、大連の地で自決をされた。

大畠さんは、私にさりげなく、「母もあのときに一緒に自決をするべきでした」とおっしゃるのです。「ただ、母は一人娘で、母の母がまだ存命でしたので親に孝ということであのときは死ななかったのだと思いますが、私は、自決しておくべきだったと思います」と。そういうタイプの女性だったということをまずご理解いただきたい。その大畠さんは、女学校から大連の中国の学校に通われて、中国人にも負けない中国語使いなのですが、その大畠さんが重々しい口調で私にこう話しました。

「宮本さん、日本が戦争に負けたときに、一番初めに逃げたのが軍、その次に逃げたのが外務省。日本国民は置き去りにされましたよ! あなたは、外務省に入ったからには、日本の人が一人でも残っていたならば、決して最後までその職場を離れてはいけません!」

――そう言われました。それが、私の原点です。

従って、そういう気持ちで、仕事をしてきたつもりです。私が、在外研修を終えて東京に戻ったのは1973年ですが、日中国交正常化の翌年でした。74年か75年だったか、残留孤児ではなく、残留婦人の方、ある程度の年齢に達していて中国に残られた女性の方が、外務省を訪ねて来られました。そして残留婦人の状況についてのご説明がございました。74年、75年頃と言いますと、中国ではまだ文化大革命が終わっておりません。従って中国では、依然としてあの文革の時代の雰囲気が社会を支配している。そこで彼女は、まず外務省に来たことが中国政府に知られるのではないか、と非常に心配されていました。自分の親しい日本人の友人の方、この方も残留婦人なのですが、たまたま結婚した相手が国民党の方だった。文革中に、ご主人が国民党の方だった為に、そのご婦人も悲惨な目に遭っている。病気をしても病院に行けない、土間でのたうちまわって苦しんでいます、と言うのです。

日本国政府として、そういう日本人がいたときに、当然、助けるべきでしょう。しかしながら、誰がそれを日本政府に知らせたのか、それが判ることを怖れて、この女性は何もしないでくれと言うのです。日本人が明らかに困難な状況に陥っているのに、私たちはそれを助けることができなかったのです。それは、私の心にトラウマとしてずっと残っております。

方正日本人公墓に感動

そして、2007 年だったと思います、城戸久枝さんの『あの戦争から遠く離れて〜私につながる歴史をたどる旅』という本を読みました。皆さん方からすれば何だということでしょうが、私はそのときに初めて、方正県の物語を知りました。

方正県が、あの当時の日本の人にとってどういう理由で大事な地、場所だったのかが分かりました。だから多くの日本の方が南に行かずにあそこに集まり、その後多くの方があ

そこで亡くなられた。それに対して、日本人の墓を作ってやろうじゃないか、いう話があり、文化大革命中の中国というのは、いや文革だけではなくて、以前の中国は反右派闘争があったり大躍進があったり、政治的に激動の時代を続けていますから、なかなかそういったことは簡単には進まない。ということで、現地の指導者が、周恩来総理に直接手紙を書いて指示を求めた。そういう物語も含めて、すべてその本から知りました。

そういうエピソードが、日本と中国の間にあったのか! 日本人のお墓を、ずっと守ってくれている現地の人たちがいてくれた! 大変、感動いたしました。ですから、黒龍江省を公式訪問する際には、必ず方正県に行くというのが、私の強い決意だったのです。

そうして 2008 年 1 月 10 日に、行くことにいたしました。やはり私たちは、残留孤児を暖かく見守ってくれた養父母の方々に、まずは最初に感謝しなければならないということで、養父母の方にもお会いするよう段取りをつけました。ところが、私が行った段階で、私が会うことができたのは、たったお一人の養父、お父さんでした。90 歳を超えていらっしゃいました。それ以外の方は亡くなられたり、または体調がすぐれなかったり、遠いところに住んでおられる、または時間がとれなかったり、といった様々な理由により、私がお会いできたのはお一人だけでした。

方正県にも参りまして、現地の方々にも、日本政府を代表して、日本人公墓を今まで守り通してくださったご厚意、行動に対して、心から感謝をいたしました。そして、その感謝の気持ちとして、2007年、2008年に三件の草の根活動への、大使館がやれる支援をいたしました。私としては、感謝の気持ちを具体的行動で示すべきだという考えでした。

周総理は、軍国主義者と日本国民を区別した!

ところが、昨年ですか、方正県政府が建造しました、開拓団犠牲者石碑、これをめぐって騒動になったのです。私にとっては、大きな衝撃でした。これは私にとっては、ああいう戦争、満州における日本の侵攻と、そういうものを踏まえながら、なおかつ日本の亡くなられた方に対して、日本人公墓を作り守り通してくださった、それが、私の中国人、中国社会に対する尊敬の念を支える、重要な事実だった訳です。

1974年1月に、私も一度だけ周恩来総理にお目にかかったことがありますが、醸し出されるその雰囲気というものは、単なる威厳というよりも、人間的な立派さ、そういう全体的なものからくる指導者としての威光、威厳をもった方でした。もうあれほどの方には私もお目にかかれないだろう、そう思いました。

その周恩来総理が醸し出す、中国の品格といいますか、中国の風格といいますか、そういうものの具体的な行為の一つが、あの方正の日本人公墓だったのです。私にとっては。

それを、今の中国人が、一部の人ですけれども、ああいう形で行動に出てそれを傷つけるということに対して、非常に衝撃を受けるとともに、強い怒りを覚えました。いったい彼らは何を考えているのだろう。中国人、中国人社会、中国国家、そういうものに対する

敬意を日本人にもたらす重要なものが、あの方正の日本人公墓だったのですよ。どんな理由で、ああいうことをするのでしょうか? あそこで大勢の日本人が亡くなった、その日本人の名前を書いて、どこが悪いのですか? 別に関東軍の指令官の名前、軍人の名前を書いているのではありません。方正に逃げて来たのは、お年寄りか、女性、子どもです。元気のいい男性は、その前に全部軍に徴用されていましたから。そういう社会のなかでも最も弱い人たちが逃げてきて、ああいう境遇に陥って、命を落とした。それに対する、同情の気持ちがあった筈です。同じ人間としての。

中国共産党のあの時代の指導者がどうして偉かったかというと、日本人を一部の軍国主義者とそれ以外の日本人に分けたということです。どういうことかといいますと、日本人全体を恨むべきではない、ということを教えたわけです。大変すばらしい教えです。恨みを抱えて、恨みを消す。

例えば、私の父親が誰かに殺された、私はその恨みを晴らす為に、殺した人を殺しに行くわけです。殺した人の子どもはまた恨みを抱えて、私を殺さなければならないでしょう。 恨みというものは、そうなってしまうのですね。人類がそうならないように、ブッダは、 仏様は「慈悲」ということを言ったのです。孔子は「仁」と言いましたね。愛するという ことです。

中国人の奥行きの深さ大きさ

日本人が中国に対して尊敬の念を抱いた、いくつかの例があります。孫文先生が、最後に神戸でされた有名な演説がありますが、日本の指導者・日本の国民に対して、あなたたちは覇道の道を選ぶのか、それとも王道の道を選ぶのか、と呼びかけました。アジアの文化の復興を願うのか、あるいはそれを破壊するのか、どうなのか。それを選ぶ重要な岐路にあなたたちは立っています、とおっしゃいました。そこで使われている言葉が、覇道と王道です。これは、孟子に出てきます。「覇道とは力を以て仁を借りる(ふりをする)ものなり」。力で自分の意志を押しつけるのが、覇道です。「王道とは、徳を以て仁を行う」、徳で人を感化して、自分に従わせる、というのが中国の最も根本的な考え方ではないですか。だから、孫文先生は、日本は覇道をとるのか王道をとるのか、と迫ったのです。そういう孫文先生の演説に、日本人は感動したのです。

蒋介石さんは、「恨みに報いるに徳を以てす」と言われましたね。それは、老子にあります。だから、日本人は、中国と中国社会に敬意をもったじゃないですか。日本が長いこと、台湾の蒋介石を支持したのは、損得勘定だけではないのです。恨みに報ゆるに徳を以てす、ということで、日本人の多くが礼節をもって接せられて日本に送り返された。だから、蒋介石への恩義を感じていた人がたくさんいたのです。そういう背景があったのです。周恩来も、中国人の奥行きの深さ大きさを示され、中国共産党は、一部の軍国主義者とそれ以外の大多数の日本人民を分けることによって、日本人全体を恨まないように、と教えたのです。

この気持ち、どこに行ったのでしょうか。方正県に葬られているのは、日本の人民ではなかったのですか? 日本の人民のなかでも、最も人民を代表する方々だったでしょう。まったく軍隊とは関係のない人々ですから。そういうことで、私は方正の騒動というものを、衝撃をもって受け止めたのです。機会があれば、自分の意見を発表して中国の人に考えていただきたい、そう思いました。

大事なのは草の根交流だ

日本と中国は、皆さん方もお感じになられているかと思いますが、多くの誤解、理解の足りなさ、そこでいがみ合っています。相手を等身大で見ることが、お互いにできないでいる。相手のイメージを自分で作り上げて、その作り上げたイメージに腹を立てているのです。

私は1990年代、アトランタで総領事をしておりました。日本と米国の貿易戦争の、最後の段階でした。日本の高級車、トヨタのレクサスや日産のインフィニティに何百%の関税をかけると、大騒ぎをしておりました。日本は自分の市場は開けずに、米国に入ってきて、経済が強くなったら、米国を乗っ取ろうとしている。そして、さんざん日本の悪口を言われるわけです。ところが、日本人の悪口を言われても、それは私の知らない日本であり日本人なのです。どうしてこんなことが起こるのか、と考えたときに、ああ!米国人が勝手に頭のなかで日本とか日本社会はこうだと考えて、それに手を振り上げて腹を立てているのか、と思いました。

今、日本と中国の間に、まったく同じことが起こっています。日本人も、勝手に作り上げたイメージで、中国はけしからんと怒っている。中国人も、勝手に作り上げたイメージで日本はけしからんと怒っている。こんなに割の合わない話はないと思います。本当に中国がそうで、日本がそうだったら、これは仕方がないです。国と国はいざとなったら、しないに越したことはないですが、ケンカもしなければならない。しかし、今考えてみたら、理由がないでしょう。私から言わせると。それなのにいがみ合っている。

日本の社会と中国の社会は、相互理解がほとんど出来ていないのです。ですから私は、草の根での日本と中国の交流がいかに大事かを、しみじみと感じています。ですから今回、皆様方のこの会に出させていただいたのも、長い間、草の根で中国との間の交流を続けていただいている、そのことへの感謝の気持ちと、同時に引き続きよろしくお願いします、その気持ちを伝えるために参りました。それくらい、日本と中国の交流、相互理解は、ますます細く狭くなって来ているのです。信じられませんね。1972年に国交正常化して、どうして月日が経てば経つほどに、こうして交流が細くなるのでしょうか?!

隣同士はどこでも仲が悪い?

これは、我々、突破しなければならない問題です。国と国との関係は、隣といえば、皆

さん方に思い出していただきたいのは、世界中隣国同士は仲が良かったためしがないのです。私はミャンマーに住んでいましたが、ミャンマーの主だった隣国は、中国・インド・タイですね。ミャンマーの人たちに言わせると、最も憎んでいるのがインド人、最も嫌っているのが中国人、最も信用できないのがタイ人、こう言うのです(笑)。ですから隣の国というのは、いい話はないのですよ。日本と中国も、いい話ばかりだというのは、これは諦めた方がいいです(笑)。古今東西、どこを見ても、隣同士は仲が悪いのです。

私の尊敬する友人で、駐日大使もして外交部の副部長(副大臣)まで務めた武大偉さんっていらっしゃいますね。武大偉さんと私は同い年生まれで、ほぼ同じような仕事をしてきました。最初に会ったのは1973年です。私が東京に戻ってすぐ、武大偉さんも東京の大使館にいましたから。武大偉さんの奥さんは、皆さんよくご存知の毛娅平という一世を風靡した美人通訳です。武大偉さんの若い頃なんか、奥さんの方が大変有名で、毛娅平のダンナ、主人と紹介されていました、いつも。それくらい奥さんの方が有名だったのです。毛娅平と話したら、彼女は揚子江の南、江蘇省の常州という街の出身です。

「宮本さんねえ、揚子江の南の人間は、北の人間を馬鹿にしていて、南の人間は北の人間のところには嫁にも行かない、という言葉があるのです」――こう言うのです。

「毛娅平さんあなた何言っているの、北の人間どころか、黒龍江省の人と結婚したじゃない(笑)、これどうなの?」と聞きました。そしたら、「宮本さん面白いですね、江南の人たちは、はるか遠くの東北地方の人はほとんど気にしないのです」――そういうことなのです。

要するに、近くの人はよく判るのです。黒龍江の人なんかもうどんな人かも判らない。 揚子江の南の人にとっては遠すぎて知らないのですね。だから、お嬢さんがお嫁に行って も誰も騒がない。揚子江の北は、悪いところもよく知っているから、嫁には行かせない。 経済的な貧富の差もありますが、よく知っている。

要するに隣の国は、いいことも悪いことも、とりわけ悪いことがどんどん目や耳に入ってくる。人との接触・往来も多いですから。どんどん色々なところが気になる。よくドイツとフランスは和解をして手を握り合ってやっている、なんて言われますが、外務省の若い人から最近聞いた話ですけれど、ドイツとフランスは相変わらず外交官同士が相手の国の悪口ばかり言っているそうです(笑)。

けれども欧州をどうするか、という大きなところになった時には、ドイツとフランスはがっちり手を握って、スクラムを組んで、欧州全体を引っ張って行った。昔みたいにケンカはせずに、手を握って大きなところではやっている。しかし、下の方では相変わらず悪口を言い合っているそうです。

ですから、あまり期待値を上げすぎず、新婚早々の夫婦みたいに、仲良くやれるという ことはあり得ないですから、ある程度のところまででいい、という現実的な目標でいいと 思うのです。それにしても、今は悪すぎる。私が思うに、そのかなりの理由が、相手を知 らないことから来ています。これは、是正しなくてはいけない。ですから、草の根交流の 大事さということです。

老留学生との出会い

皆さんのお手許に、私が日中関係学会に書いた一文をお配りしています。(この原稿の後に掲載)これが、私の草の根交流に対する原点です。どういうことかと言いますと、私は1981年から83年まで最初に北京に住みました。文革が終わってまだ間もない頃です。日本大使館と聞いただけで、一般の方は近寄りません。文革中に、どれだけの多くの人が外国人のスパイと言われて痛めつけられたことか。海外留学した人は、それだけで危険分子です。外国と接触すること自体が、あの頃は大変危険なことだったのです。80年代の初めは、その雰囲気をまだ引きずっていました。ですからなかなか外国人、ましてや大使館なんか、誰も近寄らない。そんな時代でしたが、縁があってある家族と知り合いになりました。その家族の自宅のアパートに、最初に大使館ナンバーの車で乗りつけましてドアを開けたら、「誰が来たのか?」と遠まきに皆が集まって見ていました(笑)。そんな時代でした。

その方の奥様がインドネシアの華僑で、その奥様のお姉様が日本人と結婚しておられた。 それが縁で、知り合ったのです。奥様はインドネシアの華僑ですから、私がいたときに癌 で亡くなられましたが、誰も親戚がいないわけです。彼女一人で中国に勉強にきて、そし て彼と知り合って結婚したので、中国には親戚が誰もいない。お葬式に、彼女の方からは 誰も出ていないのです。そこで私は、奥様の方の親戚ということで、葬儀に参列しました。 縁がありますし、彼女のお姉様はよく知っていますから。そして、中国という社会は本当 に面白いと感じました。翌日から、私も彼女の親戚になったのです。ですから、親戚が親 戚を訪ねてもおかしくないので、翌日から大使館ナンバーの車で乗りつけても、もう誰も 見にきたりしません。私も親戚と見なされたのです。中国社会は非常に心が広いです。日 本人は、すぐに紹介状を出せとか、あんた本当に親戚なの? なんて噂する人もいて、根ほ り葉ほり知りたがる。でも、中国は一端親戚となったら、誰もそれを問わない。

そこのお父様が、日本への留学生だったのです。そして私の、大学の先輩(注:京都大学)だった。1937年に日中事変が起こりますね。それで彼は、博士課程に進んでいたのですが、勉学を打ち切って祖国へ帰られたのです。多くの中国の方が、あの段階で、日本での勉強をやめて、中国に帰って中国のために働こうと思い、帰国されています。彼もそうでした。その後、日本とは連絡が途絶えました。

経済学部のご出身だったので、私は経済学部の事務局へ言って、あの当時の卒業者名簿を送ってもらいました。彼は一生懸命眺めるのですが、知っている名前が出てこない。そこで、さらに考えてもらうと、工学部にもう一人友人がいたことを思い出したのです。

この中国の方は劉さんという方ですが、日本語で手紙を書かれました。博士課程まで行かれた方ですから、日本語は忘れていないのです。

「私は中国人留学生だった劉です。あなたは、あの落語が好きだった高橋さんですか?」 ——相手の方は高橋さんというのですが、その高橋さんから返事が来ました。

「そうです! あの落語が好きだった高橋です! 」

この方は、日本の建築学会でも相当有名になっておられ、80 年代始めには、中国政府に頼まれて度々訪中されていたようです。そこで、この二人が大学以来、初めての対面を果たしたのです。何もいらないのです。あっと言う間に、大学時代の二人に戻っているのです。二人で手をつないで、散策しておられる。

高橋さんが語りかけます。「劉君、オレ兵隊にとられて中国へ行ったんだ……」

――しばらく黙っておられたのですが、「劉君、でもな、オレは中国の人には一発も打ってないからな」――それを聞いた劉さんは、黙って頷いておられる。

その頃の劉さんの日本に対する認識は、日本はまだアメリカに占領されている、というものでした。1981年ですよ。日本人民は可哀想だ、アメリカに占領されて、とおっしゃる。いやいやもう1950年代初頭に独立を回復して、経済成長を遂げて、日本は豊かで進んだ社会になりましたよ、と言っても、「そんな筈はない」と。私の言うことは信用されないのです。だいたい日本政府の人間が言う言葉は宣伝だと思われていますから(笑)。まったく信用しようとしない。

ところが、高橋さんが同じことを言ったら、全部信用するのです(笑)。まったく同じことをおっしゃっているのにですよ!(笑)ですから、これこそが、草の根交流のすごさだと思いました。

政府の百億円よりも友人関係の重要さ

我々が、日本に来ている留学生を大事にしなければならないということ、或いは日本で生活したことのある中国の方々の経験がいかに大事かということです。これが、中国社会における日本の根っこなのです。それくらい大事です。こういった方々は、日本の社会のことが分かっていて、そして日本の社会に対する好意を抱いてくれている。

劉さんから、下宿屋のおばさんの話も、聞かされました。自分が当時住んでいた下宿屋のおばさんが、試験の日になると、朝、生卵を一つかけてくれた、と言うのです。賄いのおばさんですから、お金持ちではないでしょう。それが自分でお金を出して買ってきて、留学生の為に試験の日になると生卵を出してくれたという。

高橋さんとか、賄いのおばさんとか、いい日本人に出会って、劉さんは、日本が中国を 侵略してあれだけの痛みを与えたにも関わらず、日本を赦すのです。日本人を赦すのです。 ですから、この友人関係の重要さ、草の根での交流がいかに大切か、ということなのです。

いくら日本政府が 10 億、100 億のお金を掛けても、草の根交流にはかないません。これだけ効果のある、日本政府の対外広報活動は出来ませんね。敵いません。負けた! と思いました。ですから、留学生事業とか、そうしたものは本当に大事にしなければならない、そう、しみじみ思うわけです。

そういう草の根交流の重要性から、皆さん方の交流に進み、そしていかにして相互理解を深めて行くか、という課題に入って行くのです。相互理解というのは、言うは易く行なうは難し、という典型なのです。よく、中国のことを理解するためには、中国のスタンダードで考えなければならない、とよく偉そうに言いますね。しかし、中国のスタンダードを理解する為には、中国を理解する必要があるのです。中国を理解しないと、中国のスタンダードは解りません。中国のことを理解しなさい、と言っているのと同じことなのです。でもこれは、奥が深く、なおかつ中国は広大です。私は中国の北方の人々が南方の人々をどれだけ理解しているのか、も疑問です。もちろん私たちよりはずっと理解していますが、住んでいる地域が違ったら、もう違うのです。ある意味、ものの考え方も含めて違います。ですから、中国は多様ですし、世代間でも異なります。私も日本の若い世代と話すと、どういう話題にすればいいのか苦労しますけれど(笑)。中国の、私と同世代の方と話をしていますと、本当に若い人とのコミュニケーションに苦労していますね。日本人と中

国人でも、同じ世代の方が、交流は楽ですよ。ですから、対象となる中国は、ものすごく

ある馬賊の話

多様で複雑ですから、十把一絡げには出来ない。

よくする例え話ですけど、皆さんもご存知かも知れませんが、戦前に 21 歳だったか 23 歳だったかで、馬賊の頭目になった男がいました。名前は小日向白朗(こひなた はくろう) という、新潟の人です。1929年の大恐慌にぶつかりまして、新潟では生活できなくて東京 に出てくる。東京でも生活できなくて、19 歳のときに大陸雄飛を夢見て朝鮮半島から北京 まで行くのです。その間、軍人も含めて色々な人にかわいがられて、情報の仕事をしよう と思って、日本大使館へ行き、その時の官房機密費ですか、それをもらって、馬に乗り諜 報活動へ出るわけです。ところが中国の人たちも、日本大使館から出てくるやつは、お金 をもらっているやつがいる、と知っているのです。そのお金を奪ってやろうと思い、跡を つけた。そして彼は馬賊に捕まります。繋がれたままでいるときに、だんだん解かってき ます。そこの農村が、自分たちの土地を守るために雇っているのが、馬賊なのです。それ がメインで、強盗は余暇でやっている。ですから、自分たちの村を守っているのですが、 暇になると、別の村へ行って襲うのですね。よその村では馬賊でも、自分の村では自衛団 です。ですから、村の人たちは馬賊を支持していますから、もう逃げられないと観念して、 仲間に入れてくれと頼むのです。そのとき彼は、嘘八百を言います。父親が中国人、母親 が日本人で、日本で生まれ育った。だから、中国語もしゃべれないし、中国のこともよく 知らない。そして、お父さんを探しに大陸まできた、と嘘を言うのです。

そうしたら、親父が中国人ならお前は中国人だ、となります。それで認められる。これが、中国スタンダードです。日本だったら、やれ戸籍がどうの、何がどうのと言い出すのではないでしょうか?(笑)中国の北方は民族が入り乱れていますから、複雑なことを言い出したら、訳が判らなくなります。ですから、まあ父親が漢民族だったら漢民族、そう

昔のビルマ、今のミャンマーで、中国の男性が出稼ぎにきて働いています。そして居残って華僑になるわけですが、だいたいビルマの女性と結婚します。1900年代くらいの英語の本に書いてありましたが、生まれた子供が男の子なら中国人、女の子はビルマ人として育てられる、と書いてあります(笑)。やはり男の子は、中国人なのですね。これが、中国スタンダードです。

そして、そこで何回も何回も出てくる言葉が、「義」という言葉です。義理人情の義です。 その頃の日本人は、「シナ人」は嘘つきで信用できない、なんて言っていました。そんな風 に言われていた中国人が、義のためなら喜んで命を捨てる、とこう言うのです。

日本人は、孫子とか楠木正成とか源義経とか、ああいうものを一生懸命に勉強して、中国に負けちゃいけないと勉強しているが、中国人のなかには一本の糸、一本の柱が通っていることを日本の軍人は判っていない、とその本には書いてあります。何かをやるときには、義がなければならない。義を達成するために、手練手管を使うことは許されるが、義がなければならない。これが行動の出発点だということを、小日向白朗は知ったわけです。そう書いてあります。

私はこの話を中国人と日本人の違いとしてよく話しますが、ふと思いました。彼が経験したことが、中国全土に言えることなのかどうか。彼がいた地域は、河北省・遼寧省・内蒙古——この辺りで活動していました。彼が馬賊に身を投じたのが今の内蒙古です。私たちが書物で得た知識が、中国全体に普遍的なことなのか、これはまた別問題です。

いずれにしても中国を理解しなければならない。そのためには、中国の人々は、我々を 理解に導くような努力をしていただきたい。我々も、中国の人々が日本のことを理解でき るように導く努力をしなければならない。そういう時機に来ているのではないでしょうか。

誤解と無知が広がる日中関係

よく言われるのは、日本の外務省は弱腰だと。主張すべきことも主張しない。よく批判されます。それでは、お言葉ですが、あなたのおっしゃった通りに、それだけをいくらがなり立てても、相手が譲歩しますか? ということです。勇ましい日本の主張だけ声高々に机を叩いて何十回言っても、相手のロジック、相手の理屈に合っていなければ、理解されないのです。相手に理解されないということを、そもそも理解していない。日本人が書いたことを、そのまま外国語に直訳して、理解され意志が通じると思っている。私の経験では、直訳して意味が通じるのは、6、7割でしょう。日本語で書いたものを直訳しても、6、7割しか意味は通じないのです。残りは、言葉を変えたり、順番を変えたりして、相手の人が解る意訳にしない限り、理解はできません。ですから、自分の主張を、いくら声を大にして何十回何百回言おうと、意志の疎通にはならない、ということです。今、我々がやるべきことは、相手が解る理屈で、自分たちの立場を説明する、ということです。これが、

相互理解の出発点です。私だって、まだまだ中国のことを理解できていません。相手を理解するということは、無限の作業です。死ぬまで続く、無限の作業の積み重ねです。そうして一歩一歩進んでいく。十年しか経験のない人は三十年の人には敵わない。そういう努力を、今我々は積み重ねて行かなければならない、そう感じています。

最近、尖閣問題で中国と日本はいがみ合っていますが、これも相互理解がうまく行っていません。ある段階で、それぞれ自分たちの物語を作ってしまうのです。単に相互理解のレベルを越えて、政治がからんできます。外交は限りなく政治ですから、従って政治の結果なのですが。今、それぞれの国民に伝えられている物語は、まったく違う物語が語られています。中国で語られている物語は、尖閣の国有化という行動によって、日本はこれまでの基本的な政策である現状維持から政策を転換した。現状維持を、抜本的に変更したと。従ってそういうものに対しては、それに見合った対応を取らざるを得ない。実効支配を日本が続けているのであれば、それを崩しましょう。物事の基礎を崩したのは、あなたたちですから。この状況を変えたければ、あなたたちから動きなさい、となる。

日本側は、東京都知事が自分のものにして好き勝手にやろうとしたので、好き勝手に日中関係を破壊させてはならない、ということで国が持とうと国有化、正確には日本の国内法に基づく所有権の移転をしたのです。国際法とは関係ないのですから、日本としては現状を抜本的に変えて、正面から中国に挑戦をしかけた気はないのです。だから中国の主張には同意できない。

しかしながら、お互いにそうした誤った物語が出来上がっていて、日本のマスコミも中国がどうしてそうなのかと報道しない。中国のマスコミも日本がどうしてそうなのかと報道しない。ですから、この二つの物語は、お互いに本質を知らずにやり合っている。これも一つの典型的な例です。

あらゆるレベルに、そうした相互理解が及ばない誤解と、極端な言い方をすれば無知が、 広がっています。これをどうにかしなくてはならない。

そのことを、私は確信をもって言えます。2006年に北京にいたときに、かなりの数の日本を研究している中国の方々と会い、私は次の様に話しました。自分の皮膚感覚では日本と中国の間の問題の70%は誤解と無知に因るものだ、と。すると日本の大学から帰ったばかりの、日本に6年滞在したことのある学者の方が私のところに来られて、「宮本さん、70%ではなくて80%ですよ」――と言われました。ですから、日本のことをよく知っている中国人、中国のことを比較的よく知っている日本人は、共にそう感じるのです。これを、早く是正しなければならない。

お約束の一時間となりました。ご質問もたくさんありそうですので、この辺で終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

≪質疑応答≫

国策に対する反省は・・・

(質問) 1949 年に中華人民共和国が成立して、北京の中国政府は、残留日本人の引き揚げの援助を表明したのです。ところが当時の岸内閣は中国敵視政策をとって引き揚げが中止となった。1972 年になって国交が回復し、田中内閣の下で「残留孤児」が再び復活したが、それまで何もされなかった。その間、何もされず残留者は放っておかれた。国策によって私の土地、福島からは 600 名が開拓団に参加し、帰国できたのは 300 名です。それに対して、ねぎらいの言葉もない。日本政府は中国にご迷惑を掛けたという配慮もない。国策によって中国の地を荒らしたというお詫びもない。そこが、根本的に解決されていない様な気がしますが如何でしょうか?

宮本 日本国政府は日本国民が選んだのです。従って、それは日本国政府の問題だけでは収まらない問題だと思います。

それから、事実関係をいくつか是正しておきます。日本国政府は、国交正常化の際に、中国に対して痛切なお詫びの気持ちを表明しています。だから、国交正常化できたのです。共同声明は、日中が十分にすり合わせた文章になっています。そして、1972 年までに国交正常化できなかった要因は、大きな国際政治の枠組みのなかで、東西冷戦がアジアでも起こってしまったということです。従って、日本は米国と一緒に、中華民国の蒋介石政権を支持する、という選択をしてきましたから、大陸との関係は進められなかった。そういうことも含めて、政府はけしからん、ということの様ですが、それに対してはお答えのしようがない、ということになります。

すなわち72年に田中角栄さんがどうしてああした表現にとどめて、もう一歩進めたお詫びをしなかったかと言いますと、日本国内にそれをさせない勢力があったからです。小さな勢力ではない。ですから、田中さんも当時の橋本中国課長も、国交正常化を実現するために、右と左の舵をぐっと左に切れば右からの批判に晒されますから、ハンドルを少し右に戻した。そいうことで全体のパッケージが出来上がっていますから、なかなか政府だけ批判されると厳しくて、政府は与党が支えていますが、与党のなかの意見が割れるわけです。田中・大平さんたちは進めようと思ったけれども、当時の福田派とかそれ以外の人たちはそれに反対していたのです。そんなふうに割れている自民党の総裁が、田中角栄でした。ですから、自分たちの意見だけではなくて、あちらの意見にも配慮した内容にしないと通らない。一方の側からすると、必ずしも十分なものではないものが出来上がってしまう。なおかつ、中国側とも交渉しなければならない。

ですから、外交交渉で出来上がってくるものは、色々な方面から批判される宿命にあるのです。あちら側から見ればこちら側が不十分で、こちら側から見ればあちら側が不十分となります。外交交渉の結果というものは、必ずどこかが不十分というものしか出来てこ

ないのです。100%自分の意見を通そうと思ったら、国際社会では戦争しかないのです。戦争で勝てば、100%自分の意志を相手に押しつけることができます。それができなければ、妥協しかない。自民党のなかの政治もそうです。力で押さえつけられなければ、妥協するしかない。

中国での田中さんの最初の晩餐会で、「ご迷惑をお掛けした」という発言をめぐって、その夜、大紛糾します。あの周恩来さんが激怒した、という話になって行きます。あれは、練りに練って、自民党のなかで通すにはこれしかないと、当時の橋本中国課長が、日本が中国を侵略したことに対する態度表明は、これに留めておこうと。そうしないと、帰って来た後で、自民党のなかが収まらない。ですから後世から見ると、別の立場から見ると、不十分です。個人的な見解としては、間違いなく日本の中国侵略ですよ。何の疑念もありません。しかし、大使をしていたときには、そう断言できないのです。政府の立場は決まっていますから。私は、今は一個人ですから、まともな歴史書を読めば、そういう結論になります。この歴史的な事実は、永久に変わらない、変えようのない事実だと思っています。しかしながら、なかなか政治の世界、外交の世界では、きれいに割り切れないことが多い、という言い訳にさせていただきます。

中華人民共和国を承認していない段階で、謝ることもできませんでした。

ですから、松村謙三さんや高碕達之助さんとか、民間の志ある方々が、先行して取り組んでくださったのです。廖承志・高崎合意というものがあって、LT貿易が始まりました。この方々は、中国における日本人の帰国の促進等、色々なことをやってくださった。こうした方々が、懸命に尽力してくださっていた。日本政府は、様々な縛りのなかで何も出来なかった。しかし民間の志ある方々が、カバーしてやってくださった。ですから、ご希望には添えなかったかも知れませんが、民間の方々の努力によって、帰国事業も進められた。中国側が最近よく、民を以て国を促す、と言いますが、これはこの時の経験に基づいています。民間の交流によって、国を促して行く。今もそう言われているのは、困難だったあの頃に民間の交流によって大きな成果を上げた、と認識しているからなのです。

慰霊したいという気持ちは・・・

(質問) 方正だけではなく、満洲の各所で大勢の開拓団関係者が亡くなられています。 線香をあげに行きたいと思っても、今に至るまで、「慰霊団」ではなく「日中友好交流団」 といったツアー名称です。これは何故なのでしょうか?

宮本 これは、それぐらい中国の人々にとっては敏感な問題だということです。先ほども言いました様に、一部の軍国主義者とそれ以外の日本人民とを分けましたね。しかし、大多数の中国の人々にとって、その人たちに手をあげ、その人たちを傷つけ、痛みを与えたのは、東條英機ではありません。普通の日本人がやったことです。もちろん、軍の命令で仕方なく行ったので、志願して行ったのではないとしても、しかし中国の人たちから見

たら、普通の日本人がやったことです。

中国の指導者の人たちは、軍国主義者と日本人民を分けて、これで恨みは終わりにしま しょうと言ったのですが、一般大衆がそれを理解するためには、まだまだ時間がかかりま す。

72 年に国交正常化した際、田中角栄さんが万里の長城へ行きました。あの時に、中国の対日関係者が何をしたかと言いますと、総動員されて、周辺の住民に国交正常化の意義を説明してまわったのです。なぜ日の丸の掲揚を認めるのか、日の丸は日本の侵略の象徴ですから。

1990 年代の終わり頃、北京にいたときのことです。私の従兄弟、と言ってもだいぶ私より歳上なのですが、山西省で戦死をしています。戦争当時に現地から送られてきた写真は、いつも現地の子供たち 10 人 20 人に囲まれて、自分は上半身裸になったような、そんなのどかな写真ばかりを故郷へ送ってきていました。そこで私の親戚も、亡くなった場所へ行きたい、慰霊をしたいとのことで、山西省の政府にお願いしたことがあります。検討はしてくれましたが、結果は「NO!」でした。

もちろん、軍人と開拓団はまた異なりますが、亡くなられた方への思いは解ります。しかしながら、この問題は、今日に至るまで、非常に彼らとしては扱いにくい問題なのです。ですから、隠れるようにしか、慰霊はできなかった。今日、これだけネット社会になると、恐らく中国の当局者の立場になれば、ネットの反響をとても気にすると思われます。

私がミャンマーに行くことになったときに、私の故郷は幼い頃 9 千人ほどの小さな村でしたが、母親がすぐに 14、5 人の名前をあげました。みんな、ビルマで亡くなっているのですね。しかしながら、長い間、ビルマ政府と少数民族との抗争が続き、日本人が亡くなっているのは少数民族の地域が多く、今日に至るまで遺骨の収集も十分に進んではいません。ミャンマーの場合は、あちらこちらに慰霊する場所があり、大変ありがたかったのですが……。

慰霊したいというお気持ちは、私もよく解りますけれども、中国で行う場合には、非常に難しい微妙な問題があるということを、ご理解いただきたいです。

遺骨収集について

(質問)遺骨収集のお話が出ましたが、あるとき、厚労省の方に、中国で遺骨収集をやらないのですか? と尋ねたところ、ある時期に中国側に打診したが断られた、とのことでした。その後、また中国側に持ち掛けることはなかったのでしょうか? 遺骨収集というのは、行軍の軌跡をなぞることでもありますから、中国側にとっても、日本軍の侵略の軌跡が明らかになる、というメリットがあると思います。今後、そうした働きかけはできないものでしょうか?

宮本 少なくとも私が中国を担当していたときには、中国側への打診はありませんでし

た。私もそうしたことが実現することを希望しますが、中国の対日感情が良くなってないのです。先ほど言いました様に、対日感情が良くないことのかなりの部分は誤解だと思います。日本人は、日本社会は反省していないと言われますが、一部の右の人たちの言動と、我々を一緒にして欲しくないですね。私の一生のなかで出会った人たちのなかで、あの様な人たちは一人もいませんよ。それを、日本が右傾化したとか、軍国主義が復活するとか言われても、こんなに高齢化して行く社会で、誰が兵隊になれるのですか?(笑)社会保障にますますお金が掛かって、軍事費を増やす余裕はないですよ。どうしてそれが、この社会が軍国主義化するのですか、ということです。社会やマスコミがそれを煽っている面もあるのですが。

私は、日本の草の根の社会と、中国の草の根の社会とが、本当に心の交流をして欲しいと願うのは、そういうことです。中国の人々には、日本と日本人をもっと知ってもらいたい。そうすれば、どうして日本人が遺骨にこだわるのかが、解ってもらえると思います。それは、日本人の宗教観であり文化観であり価値観なのですね。中国とは異なる価値観です。ミャンマーはもっと異なります。向こうは小乗仏教ですから、命がなくなった途端にその人の魂は他の場所へ行く、つまり残った身体はもう何の意味ももたないのです。中国も、日本ほどには遺骨にはこだわらない様な気がします。そうしたことも、もう少し理解し合えればいいですね。

しかし、そうした我々の理屈を中国社会が理解して受け入れましょうと、そうなる為には、やはり国と国との関係が今みたいなギクシャクした関係ではなく、暖かい感情の交流があって、それを継続させないとだめですね。なかなか難しいです。亡くなられた方々の霊がさ迷っているのであれば、何とかしてあげたいのですが……。

アトランタにいたときに、ある会合で、日米関係の十数人の集まりでしたが、何の気なしに、南北戦争の話をあまり聞きませんが南部の社会から南北戦争の記憶がだんだん薄れているということでしょうか? と聞いたのです。二人の米国人が「そうですね、感じませんね」と答えましたが、北部から移住して来られた方々でした。三人目が南部の方で、立ち上がり、「私のお爺さんは北軍の捕虜収容所で命を落とした。戦争ではない。戦争が終わった後に、捕虜収容所で亡くなった。それを忘れろと言って、忘れられる訳がないじゃないか!」

――と怒りだしたのです。明治維新の前、戊辰戦争の頃です。南北戦争でいらなくなった鉄砲が、たくさん日本に来て官軍が使いました。それはさておき、忘れていないのですよ、被害者の方は。同じ米国のなかで、同じ民族同士ですら、こうです。福島県の方がまだ山口県を意識するようなものですね(笑)。ましてや、異なる民族同士でしたら、恨みは長続きしやすいです……。

基本は時間が解決してくれるとは思いますが、遺骨収集といった話は、胸が痛みます。

学校教育でも必要な歴史認識

(質問) お話にもありましたが、周恩来が日本の軍国主義と日本人民は区別すると言った。日中国交正常化のときにも、対日賠償金を求めないとしたときに、中国の対日関係者が地方をまわって、日中国交正常化の意義を説いたといわれています。それから、1958 年でしたか、武漢で日本の最初の展示会で掲揚されていた日本の国旗を見た中国の婦人が怒りに震えて泣き叫び、地べたに座って動かなかったと聞きました。それを知った周恩来が関係者に対して、その婦人に諄々と日中友好の大切さを説きなさい、といった話を聞いて感動するのですが、今の中国では、日本政府への反感が即日本人への反感に結びついてしまう。日本でも高碕達之助さんとか岡崎嘉平太さんとか、周恩来と信頼関係を築き胸襟を開いた交流がありました。

今の日本の政治家は、安倍首相にしても、侵略の定義は国際的にはっきりしていないとか、そんなことを平然と言うような、今の政治家はもうどうしようもないと思っています。 自民党であろうと民主党であろうと。そういった点で、外務省の良心的な人たち、外交を 熟知している人たちが、政治家をもっとリードするべきではないかと思うのですが?

宮本 政治主導は正しいのです。日本国憲法で、国会が国権の最高機関である、政治家の集まりが国家権力の最高のものだと決めてあります。政治家は、国民との関係において責任を負う。大臣も総理大臣も責任を負う。ところが、官僚機構は、責任を負えないのです。従って、責任を負える人が主導するのは当然です。

ただ問題は、責任を負える人が、それなりの水準を持って指導していただけたら一番いいですね(笑)。これが理想です。とりわけ、民主党の時代に、マスコミもいかんと思いますが、官僚バッシング、官僚叩きを目玉にしましたね。そうして、官僚の意見を聞けなくなってしまったのです。官僚に聞いたら、政治主導ではなくなるという錯覚ですね。政治主導とは、大きな方向性を決めることであって、具体的な方策を進めるのは、政府の中であろうと外であろうと、専門家集団なのです。専門家集団しか政策は作れないのです。すべて霞ヶ関に頼らなくても、他の専門家集団でもいいですから、専門家じゃないと無理です。政治家には事業仕分けも難しいと思います。大きな方向、例えば婦人の地位を向上させようという方向、それは政治家が出せばいい。それを政策同士の整合性を保ちながら、一連の具体的政策をどう作り、進めるか。それは専門家集団に任せればいい。

それから基本的な歴史認識というものは、日本の学校教育のなかで、もう一度やるべきだと思います。よく言われますが、大学入試に入れるべきです。大学入試に出せば、みんな勉強します。簡単ですよ。なぜだか知りませんが暗黙の了解で出さないから、学生は勉強しない。

(質問)中国の学校は現代史から勉強しますね。日本は古代から始めて、だいたい明治維 新が終わると時間切れになる(笑)。私は文部省が意図的にやっているんだと思います。 宮本 文部省の初等教育、中等教育の担当に知り合いがいないので判りませんが、私も歴史が好きで、寝る前はだいたい歴史の本を読みます。あんまり面白い本は寝ずに読んでしまう、難しい本だと読まずに寝てしまう、歴史の本がちょうどいいです(笑)。靖国の問題や、近隣諸国とのいろいろな歴史問題がありましたから、その度に歴史書を読み漁りました。そうすると、一級の歴史家が書いた本というのは、日本の主流の歴史学会の意見というのは、極めてまともですよ。違和感がありません。

そういう歴史家の歴史が後世に残るのであって、そうじゃないことを言っている人は、 専門家が見ればすぐに化けの皮が剥がれて、歴史の検証に耐えられないですから、長続き しません。日本の歴史として残るのは、そうした主流の一流の人たちが書いた歴史です。 中国の人たちにもよく言うのですが、一部の人たちが書いた何とかの歴史とか、そんなも のをいちいち気にしないで欲しい、と。日本でやらなければならないことは、その一流の 歴史学者が書いた主流の歴史を、若い人たちに教えることです。これはやらなければいけ ません。日本人は歴史をしっかりと学ぶ。それを中国の人にもしっかりと伝える。そして、 中国の人は歴史、歴史と言わない。こうなれば、日中関係は好転するでしょう。

日本は第二次大戦の総括をしていない!

(質問) グリーンピア政策も年金政策も東日本大震災・原発事故も、東京電力も、そして 満洲移民も、政策を進める立場だった人が誰も責任を取っていません。マスメディアも叩 かない、誰も追及しない。やり放題やって、責任も取らずに先生方は去って行く。そうい う下地、風土が日本にはあります。そうなってしまった原因はどこにあるのでしょうか?

宮本 私の個人的な意見ですが、第二次世界大戦に至った総括を、日本の社会として、していないことではないか、と思います。我々日本人は、自分であの歴史を振り返り、誰が間違っていて誰が責任を取るべきだった、と総括しましたか? 日本人はやっていないじゃないですか? 大罪を犯した人たちを、誰も追及していない。今の年金問題や何とかピアとか、戦前の責任問題に比べればたいしたことはありません。あんな大きな責任問題をきちんと追及しない民族、社会なのです、我々は。昨日今日に始まったことではなく、もうかなり昔からそんなことを繰り返している。そこは改めるべきだと、最近つくづく思います。

家内と話していたら、最近の子どもたちは土曜日も学校へ行って勉強している。少し前に"ゆとり教育"を大々的に推奨していた人たちは、どこに行ってしまったのでしょう? あの人たちは全然反省していませんね、と家内に言われました。

こういうことはおかしいと思う人間がもっと増えないと。ところが日本人は、もう済んだことはいいじゃないですか、となる。このような状況は、私個人は、まったく納得していません。責任ある方々は、当然責任を取るべきです。責任を取ることが当たり前です。 そういうふうに教えられて来ませんでしたか、子どもの頃から。少なくとも家庭内では。 どうしてそれが実現できないのでしょうか?

日本社会をさらに良質の、魅力ある社会、世界中から日本の社会はいいなと思われる、 そういう社会を作って行くことが、私はこれからの日本が生き残っていく道ではないかと 思います。図体、規模は中国の方がどんどん大きくなって行きますから、日本はだんだん と霞んで来ます。そうならないようにする、唯一の道は、世界の人々が素晴らしいと言っ てくれる良質な社会を作ることです。その為には、今言った様なことを改めることからし か、できないのだと思います。

ですから私は、個々の問題について、きちんと責任を取るべきだと思います。うらみがましくネチネチやるというタイプでは決してありませんが、せめて「すみません、間違っていました」――と言うべきですね。そういう社会、風土にしたいと思っています。外務省も含めていろいろな政府の不祥事もありましたが、私がそれを経験してきての結論は、問題はすぐに認める、すぐに謝る、です。日本社会はいいですよ、謝ればすぐに許してくれますから。なかなか許してくれない社会も多いですよ。だから謝らないのです、他の国の人たちは。日本はいい社会じゃないですか。だから、謝ればいいんです。間違えました、と。そういう社会になればいいなと。それが、良質の社会を目指すひとつの方向だろうと思います。

100年かかろうとも地道にやるしかない

(質問) 誰も責任をとらないという話がありましたが、それは国や政府だけではないと思います。日本がやったこと、日本政府がやったことは、日本の国民がやったことだと思うのです。国が悪いとか、政府が悪いとか、国策が悪いとか、言いますが、当時その国策を後押ししたのは国民自身なのです。ですから私たち自身も、国民としても、当時のことは反省をして、やるべきことはやる、同時に国にもやってもらう。どちらが悪いという問題ではない。

我田引水で申し訳ないが、私たちが「満蒙記念館」を民間主体でやっているのはそこに 理由があるのです。それは、満蒙開拓のあれだけの悲惨な経験をして、なぜ方正日本人公 墓の一カ所しか公墓がないのかと言えば、それだけのことをしてしまった歴史の帰結なの だと思います。中国側にもそれだけの思いがあるから、一つしかない。でもそのことをい つまでも引きずっていてはいけないから、私たちは方正の会を民間としてやっている。そ れがこの会の存続の意義なのだと思います。宮本先生からのご支援も引き続きお願いした い

宮本 喜んで支援させていただきます。歴史の事実を埋没しないように残すということは、ものすごく重要です。我々も微力ですが、皆さんの努力に協力させていただきたいと思います。

(質問) 私は中国人ですが、日本で 22 年間住んでいます。先生のまわりの日本人同様に、

私のまわりもすばらしい日本人ばかりで、皆さんに支えられてここまできました。ある日本の私立大学で日中史を教えていますが、中国が戦争賠償請求を放棄した金額は 500 億ドルです。それを今の中国人が知ったら、また反日運動が起きるかも知れませんが (笑)。私も先生が言われた草の根の交流が重要と考えて、それを続けて行きたいと思います。

(質問) 中国帰還者連絡会の者です。責任問題のお話が出ましたが、私もそう思います。 政府を追及するだけでは済まない、我々にも責任がある。中帰連の皆さんは撫順戦犯管理 所に 6 年間収容されました。最初は軍の命令で自分の責任ではないと言っていたものが、 実行者としての自分の責任を認めた訳です。2002 年の解散まで、自分たちの虐殺を証言し ながら、平和と日中友好のために頑張ってきたのです。戦後、A級戦犯だった岸が首相に なりましたね。731 部隊の石井四郎が免責されましたね。それを許したのは誰ですか? 我々 じゃないのですか? やはり我々は社会とか政治にもっと関心を持たなくてはいけない。今 のジャーナリストも腐りきっています。それは我々が関心を持たなかったからです。質問 ではなくて意見で申し訳ありませんが……。

宮本 中国課長をしていたときに、自衛隊との交流も意識的に行いましたが、その時に 現職の自衛官から厳しく批判されるわけです。中国に対してどうしてあの様な卑屈な外交 をやるのか、と。なぜ中国に押されたら押されっぱなしなのか、と。外交の現場にいた私 と、認識がまったく異なるのです。

中国側は国内でなかなか大変でした。日本は当時竹下さんとか強い方がいてくれて、日本の対中政策は余裕がありました。中国の対日政策は余裕がなかったのです。それぞれにとって重要な日中関係を維持するために、じゃあ中国国内も大変だから、今回は日本側が少し譲歩してやろう、今回は面倒を見るよ、それが私の対中外交だったのです。ですから、ぜんぜん押されている意識はありません。日本と中国の関係は、我々にとっても大事ですが、中国にとっても大事です。お互いにとって大事なものを守るために、今回は日本側が少し大きめに譲歩しましょうと。ですから、私が中国大使になってから、言いました。そろそろ借りを返してくれと(笑)。

その時に、その自衛官について考えました。この人はどうしてこの様に見るのか? そこにはやはり、個人個人の社会に対する姿勢とか、いろいろなものが影響していると思いました。日本の社会の人々が反中感情になるのは、その人たちが置かれた心理状態に原因があります。中国の人々が反日になるのも、中国の人たちが置かれた心理状態が、非常に大きく影響していると思います。

日本は20年間、トンネルの暗い闇のなかでした。日本の景気が良かった頃をまったく知らない人たちが、世の中に現れています。中国側には景気のいい話ばかり、威勢のいい話ばかりが出てくる。そうした心理状況が、中国に対するネガティブなイメージを増幅させているのではないか。一方中国も、国内では問題山積です。日本だけではなくて、社会の

いろいろなところに対して不満を持っている人たちがいます。その人たちが、日本はけし からんと言っている。

大きなところで、1972 年に国交正常化した時は、中国は文革中で本当に困っている時期でした。当時日本は、順調でした。大部分の日本人は、中国に対して悪いことをしたと思っています。真珠湾攻撃が日本の侵略行為だと言われると、少し首を捻りたくなる人がいても、中国大陸で起こったことについては、日本が悪いことをしたと、多くの日本人が思っていました。中国側のスターが周恩来さんでしょう。周恩来さんのイメージで中国というものが伝わって来る。ですからあの当時、中国に対する好感度は、日本国民の80%以上ありました。それが現在では、逆になってしまっている。隣同士ですから、引越しできません。50 年かかろうが100 年かかろうが、地道にやっていくしかないです。ケンカは止めた方がいいですよ。どんなにエネルギーがかかっても、相互理解を作っていくしかないです。



(講演中の写真は大類 (P14) と森一彦 (P33) が撮った)

<みやもと・ゆうじ:1946 年福岡県生まれ。69 年外務省入省。中国課長を経て、2006 年から 10 年まで特命全権大使を務める。現在は宮本アジア研究所代表、外務省顧問、日本日中関係学会会長他を務める>

日中戦略的互恵関係を支え留学生交流

宮本 雄二

2013.6.1

私は、われわれが必要としている「新しい時代の新しい日中関係」なるものが、実は「日中戦略的互恵関係」なのであると主張してきた。それは、物事を長期的な観点から、より広い視野に立って眺めることで(戦略的)、そこから導き出される共通の利益を基礎にした関係(互恵関係)をつくりあげていこう、というものである。

この新しい関係を支えるものの中身は多くある。これから順不同で、思いつくまま触れていきたい。

「これから、中国とどう付き合うか」という本の中で、私は日本と中国が、よって来る原因を異にしても、結果として国民世論なり社会の雰囲気なりが、政府の外交を左右する時代になったことを強調した。「戦略的互恵関係」を固め、発展させるうえで、国民レベルでの相互理解、相互信頼、そして相互尊敬が必要不可欠なものになったということである。

だが、どうしたら、1.3 億と 13 億の間に、そのような世界をつくりあげることができるのであろうか。気の遠くなるような仕事である。しかし道がないわけではない。そのひとつが間違いなく、留学生の交流である。

日中関係学会の理事でもある五十嵐貞一さんが主宰する「xx」という NPO 法人がある。 同じく理事である杉本勝則さんも副会長(?)をつとめている。中国からの留学生にバーベキュー大会やスキー体験、あるいは国会見学などを通じて日本社会と日本人を知ってもらい、日本人との心の交流の場を設けている。全員ボランティアである。去る 2 月、このNPO の実施する「xx」に参加した。場所の関係で中国の留学生は各組織の代表だけの参加となったが、心温まる会であった。

その光景を眺めながら、1981 年に初めて北京の大使館に勤務したころの、ある貴重な体験を思い出した。留学生交流が、人と人との心の交流にいかに大切な役割を果たしているかということを実感させられたからである。そして日本人と中国人との間に相互理解、相互信頼、そして相互尊敬を築くことができることを確信させられた体験でもあったからである。

1981年1月、ニューヨークの国連代表部から北京の日本大使館に転勤となった。前年秋の国連総会で、日本は翌年1月から任期が始まる安全保障委員会非常任理事国選挙に当選していた。中国に赴任直前、晴れがましくもアフリカ担当官として安全保障理事会の代表団の座席にも1回だけ座ることができた。実は前年の選挙は、78年の選挙ではバングラデッシュに負けており、背水の陣でのぞみ捲土重来を期して勝ちとったものであった。

赴任前、国連代表部のある同僚から、北京に親戚がいるので米ドルを現金で渡してほし

いと頼まれた。その当時、中国の庶民は外貨を相当不利なレートで交換させられていたからである。無理もない。中国政府自体にほとんど外貨がなかった時代の出来事であった。

先方から連絡が来るというので待っていたが、なかなか来ない。この頃、普通の中国人は、外国大使館の連中はみなスパイだと思っていた。文革が終わってまだ 5 年しかたっておらず、文革中の宣伝効果はまだ残っている。そういうことで、大使館に足を運ぶのに躊躇しているのかなと思っていた。あとで聞くと大使館の前のガード(当時は人民解放軍の兵士)が入れてくれなかったとのことであった。

ある時偶然に大使館前で彼と遭遇した。劉世鵬君である。中学校の数学の教師をしていた。中国の知識人の雰囲気をもっており、その場ですぐに好感をいだいた。その後、今日まで長い付き合いとなるが、価値観というか倫理観というか、そういうもので違和感を覚えたことは一度もない。ほぼ同じであった。台湾だけではなく大陸の中国人とも友人として付き合えると確信させてくれた貴重な出会いであった。

時間をおかず、龍潭湖の近くにある彼のアパートを家内と二人の子供を連れて訪れた。 そこで彼の御父君とお目にかかった。なんと私の大学の大先輩であった。戦前、三高から 京都帝大に入り、蜷川虎三教授の下で統計学の博士課程まで在籍していたというのだ。1937 年、日中戦争勃発とともに中国に戻っている。多くの同時代の中国人と同じように、その 後数奇な運命をたどる。新中国成立後、対外貿易部に籍を置くものの、同僚の不祥事で外 国留学組は全員左遷され、彼は貴州省に送られた。そして文化大革命を迎える。お会いし たのは北京に戻ってまもなくの頃であった。

昔の日本の友人に会いたくないですか、と聞くと、無理だろう、と答える。探してみましょうよ!と私が言って、そこで劉さんの友人探しの手伝いが始まった。まず京都大学経済学部に卒業生名簿を送ってもらった。劉さんは何度も何度も眺めたが、いないな、という。戦争で死んだかな、ともいう。亡くなった方は死亡と書かれていますよ、と答えたものの、残念でならない。他にいませんか、と聞くと、しばらぐ考えて、あっ!工学部に高橋君がいた!と叫ぶ。工学部の事務局に再び卒業者名簿を送ってもらった。確かに高橋さんの名前は、そこにあった。

高橋君。君はあの落語が好きだった高橋君ですか。私は、中国人留学生だった劉です。 これが劉さんの手紙の書きだしであった。もちろん日本語だ。そして高橋さんは「そう です。落語が好きだった、あの高橋です」という出だしで始まる手紙を返した。

高橋さんは建築家として成功しておられ、中国政府とも仕事の関係があるという。次の 出張の機会に高橋さんと会えることになった。私はドライバーとして一緒に行動した。

天安門前広場で殻つき落花生を買い、昔もこうして食べたな、といいながら手をつないで歩く。60歳代の半ばを超える二人の老人の40年ぶりの再会であった。二人には40年の歳月の流れはまるでなかったように見うけられた。高橋さんは石段に腰を下ろし、静かにゆっくりと話し始めた。

劉君な、わしは戦争で中国に来たんや。山西省やった。でもな、中国の人には一発も打っとらんからな。

劉さんは、黙ってゆっくりとうなずきながら聴いていた。

高橋さんが日本に帰り、私たちは再び劉家を訪れた。劉さんは子供たちや孫たちを前に

高橋さんの話ばかりしていた。

高橋君は家に3台もテレビをもっとる(後で聞くと2台はまだ捨ててなかっただけとのこと)。高橋君からもらったライターは凄いだろう(何ということはない百円ライター)。

まだ米軍に占領されていて日本は可哀そうだという劉さんに、戦後の復興と繁栄ぶりをいくら説明しても受け入れてくれなかった(日本政府のプロパガンダととられた)のに、 高橋さんが同じように説明すると無条件で納得する。それを子供たちや孫たちに話している。

日本政府や大使館の広報は、高橋さんには逆立ちしても勝てないことを痛感した。草の根の人と人との交流がいかに大事かを目の当たりにした瞬間であった。

このように留学を通じる異なる国民同士の心と心の交流は尊い。劉さんが日本に留学した時代は、満州事変から本格的な日中衝突に至る時代であった。おそらく街では反中の気分があふれ、「支那人」、「チャンコロ」の罵り言葉が行きかっていたことであろう。中国人としても嫌な思いをたくさんしたであろう。

でも劉さんが口にしたのは、下宿の賄のおばさんのことであった。試験の日の朝、賄のおばさんが「あんたら、今日は試験やろ。これ食べて元気つけや」といって、生卵を一つ、お碗に割ってくれたという。自分も貧しいのに、中国人の学生のことにまで気を配ってくれたのだ。この一市井の民の好意を、劉さんは終生忘れることはなかった。

ここに異なる国民同士の交流の原点があると感じた。すべての人と仲良くなることはできないし、できるはずもない。しかし一人でも二人でも、本当に心の通う人と出会えれば、そこに信頼と尊敬は生まれる。国民同士の相互信頼や相互尊敬というとき、実際はこういうことの積み重ねなのである。一人でも二人でも真の友人をもち、尊敬できる人に出会うこと。それが答えであると思う。

その後、劉さんは三高や京大同窓会の支援で二度訪日することができた。そして、もっと多くの友人たちとも再会できたことをつけ加えておく。

だから私は、NPO 法人「xx」の活動に感激し、心からの敬意を払ったのである。この方々の善意の活動は、必ず中国人留学生の心に日本と日本人に対する尊敬の気持ちをいだかせるはずだ。80 年前に、何人かの日本人が劉さんに与えたのと同じように、である。

2008 年に「日中戦略的互恵関係」が打ち立てられた。そしてこの稀有な機会をしっかりとつかまなければならず、そうすることが後世に対するわれわれ世代の責務であることを強調してきた。昨年 9 月の尖閣諸島での事件は、その基礎がいかに脆弱であるかを白日の下にさらした。

しかし悪いことがあれば良いこともある。両国政府も、この対応を「深く反省」し、元 に戻そうという気持ちを強めている。これから着実に元に戻っていくことであろう。

このチャンスをしっかりとつかみ、普段着の日本人と中国人のイメージを両国の社会に 普及させ、定着させていかなければならない。この意味でも留学生の相互交流は大変重要 である。意識的に強化し、受け入れた留学生が日本社会の良いところにも触れることがで きるように、われわれ自身、地道な努力を続けていきたいものである。 (了)

「満蒙開拓平和記念館」開館から半年を経て

満蒙開拓平和記念館 専務理事 寺沢 秀文

1. 記念館の開館と順調な来館者数の推移

「方正友好交流の会」の会員の皆様を始め多くの皆様方よりの温かい御支援等を得て、 足かけ8年を経て長野県阿智村にてようやく完成、開館まで漕ぎ着けた「満蒙開拓平和記 念館」。4月25日の開館より早いものでもう半年以上が経過いたしました(11月23日 現在)。

記念館建設までの経過等についてはこれまでにも何回もこの『星火方正』でも取り上げて頂いていますので、今回は主として開館後の状況等について報告させて頂きたいと思います。

全国で唯一の満蒙開拓に特化した記念館を、全国で最も多くの開拓団を送出したこの長野県南部の飯田・下伊那地方に建設しようと取り組み始めたのが8年前の2006年(平成18年)夏のこと。以降、紆余曲折を経つつも、昨年9月11日の建設着工までに全国からお寄せ頂いた浄財御寄付は約5千万円、これに長野県並びに地元市町村よりの公的助成が7千万円、また林野庁から国産材使用助成として3千万円、計約1億5千万円の総事業資金にての着工、そして今年4月の竣工、開館の運びとなりました。

開館式は4月24日、この記念館に対し構想時より特別の思いで御支援頂いてきた阿部守一長野県知事始め100人以上の御参列にて挙行。当日は生憎の春の雨の中、記念館前の駐車場にテントを張っての開館式でしたが、この記念館の開館を楽しみにしながらも先に鬼籍に入られた多くの御支援者、関係者等の皆さんの嬉し涙であったかと思います。翌25日より一般公開、初日は298人の皆さんに御来館頂きました。直後のGW中も多くの来館者にお越し頂き、GW明けの5月9日(木)には平日ながら403人という1日当たり最多の来館者がありました。以降、順調に推移し、7月28日には1万人、10月30日には2万人を突破、この原稿を書いている11月23日現在、23,460人となっています。開館営業日一日当りの平均来館者数は131人にて、信州の山奥の交通不便な立地条件下にあり、また娯楽施設等でもないこのような小さな記念館としては上々の滑り出しかと思います。実は昨年秋頃、公的助成等を受けるために作成、提出した事業計画書の中で最終的に記載した入館者見込み数は年間5千人でした。

しかし、内情を明かしますと、当方自身としては当初段階では、これまでの足かけ8年間の事前活動の中で得てきた感触等よりして「初年度で年間3万人、2年目以降も2万人はいける」と見込んでいたのですが、内外から「そんなに入るはずがない。もっと身の丈に合った現実的な見込み数を」との修正意見が相次ぎ、当方もこれにいちいち反論しているのも馬鹿馬鹿しく「どうせ計画書なのだから」と要請通り3万人 \rightarrow 1万人 \rightarrow 5千人と修正していったものでした。しかし、「身の丈に合った」という意見が出ること自体が、こ

れまで戦後70年近く「満蒙開拓」の置かれていた位置、不都合な史実として振り返ることを良しとしなかった風潮を物語ることであったかと思います。しかし、取り敢えずの開館後のこの反響の大きさは、満蒙開拓という史実の大きさ、現代においてもこの教訓から学ぶことの多さを改めて再確認することが出来ることかと思っています。

しかし、喜んでばかりもおられず、今の好調さはあくまで開館初年度の珍しさ等もあってのことであり、問題は2年目以降です。間違いなく来館者数は落ち込むことでしょう。 しかし、満蒙開拓を通じて平和を発信していくというこの記念館の理念を忘れず、知恵を 絞りながら、今後の運営に取り組んでいきたいものと思っています。

2. 来館者の分析と各界等からの反響等

約半年間の来館者内容を分析してみると、やはり満蒙開拓関係者等を中心とした中・高年齢者層が多いものの、思った以上にお若い方、あるいは満蒙開拓とは全く関係の無い皆さんの御来館もかなり多く、満蒙開拓の史実から学ぶことの奥深さ、大切さを館関係者も改めて痛感しています。また、山間部にあって公共交通機関等の便も悪い中で、思った以上に県外等遠隔地からの御来館者も多く、北海道から沖縄まで全国各地からお訪ね頂いているのは本当にありがたいことです。正確な統計等取っているわけではありませんが、地元等長野県内の方が約6割、県外からが約4割程度かと思います。県外からはこの飯田・下伊那からは高速で約1時間半程度の名古屋等を中心とした中京方面からが過半を占めるものと思われます。

また、この10月等を中心として団体客の来館が非常に多く、132坪という小さな記念館だけに、団体が2つ、3つと重複してしまうと、狭い展示室は人でいっぱいになってしまい、当方ら説明ガイド等も手が回らず、御迷惑をおかけしてしまうこともしばしばです。開館後は自主自営の民間運営でとされている中で、スタッフ等の人員不足等も深刻なものがあり、当方ら役員も本業の合間や休日等にはなるべくボランティア出勤し対応しているのですが、展示室の狭さと共にスタッフ確保の問題は今後の課題です。

これまでの多くの御来館者数と各方面等よりの反響を頂く中で、改めて満蒙開拓の史実を語り継ぐことの意義の大きさも痛感しています。満蒙開拓は開拓団始め多くの犠牲を出した「被害」という面と共に、大切な農地や家を日本人に奪われた中国人から見れば満蒙開拓団は「加害者」でもあり、「被害と加害」という両面を持つこのテーマを語り継いでいくことには様々な難しい面もあります。しかしながら、当初心配した各種方面等よりの圧力や抗議等は今のところほとんど無く、満蒙開拓の被害と加害という両面に目を向け、そのことから平和の尊さを学び、二度と同じ悲しい犠牲は出さないという当館の理念はある程度御理解を頂けているものと思っています。当方や記念館スタッフ等も時間的余裕の許す限り、来館頂いた皆様とはなるべくお話等させて頂き、皆様のご意見や展示等を見ての感想等をお聞きするようにしていますが、お陰様にて多くの皆様方より「とても勉強になった」、「良く頑張って、こんな有意義な記念館を作って頂いた」等々の有り難い感想や激励の声を頂いているのは有り難い限りです。しかし、来館者の声や記念館に寄せられたメールでの意見等の中の一部には、「満蒙開拓は当時としては仕方の無いことであった」、

「日本人開拓団により満州は発展しインフラ整備も進んだ」、あるいは「満州は侵略などではない」等の意見を述べられる方も少数ながらおられます。こういったご意見に対しても、なるべく一度はきちんと我々の知り得る限りのことをお伝えし我々のスタンスを明らかにさせて頂いていますが、意見の違いが平行線になってしまう場合も時々あります。

また、構想当初から懸念していた反日活動家等の中国側からの反応等については、現段階では特に攻撃的意見、批判的意見等は寄せられていません。開館以降、まだ少数ながら、中国人の方や中国人留学生等の方もお見えになりましたが、総じて「満蒙開拓の被害と加害」という両側面に触れられていることに一定以上の評価を頂いています。展示室の壁面に旧満州全土への開拓団の入植位置等を赤い点で示した旧満州国図が展示されており、記念館の人気スポットの一つになっているのですが、ある時、来館されたある華僑の方が、この沢山の赤い点を見て、「自分たちの故国がこんなにも日本人に侵略されていたのかと思うと胸が詰まってしまった」という感想を後で漏らされた方がいたそうです。この話を聞いて、改めて、様々な顔を持つ満蒙開拓を語り継いでいくことの難しさと重要さとを痛感しているところです。

3. 記念館活動から明らかにされつつあること

記念館では、開館後も元開拓団員等の皆さん等から寄せられる沢山の資料やご意見等を整理、分析したり、また元開拓団員やその御家族や関係者の皆さん等との意見、情報交換等を通じて、改めて満蒙開拓の実相等が少しづつまた明らかになっていることは開館による大きな効果であると思っています。

また、記念館では月2回の元開拓団員の体験談をお聞きする「語り部」の会の定期講演や、団体からのご希望等に応じての「語り部の会」など、これまでに50回以上の「語り部」の方のお話をお聞きする機会がありました。開館以前から「語り部」活動を続けてきた地元の「語り部」の皆さんに加え、隣の岐阜県から送出した「黒川分村開拓団」の遺族会からも多大なご協力を頂き、岐阜県内からも語り部の方に何人も来て頂いています。

そういった「語り部」の方のお話をお聞きする等の中で、改めて感じるのは、国策で行われた「満蒙開拓」という史実に対する分析、総括、あるいは反省等がやはり不十分ではないのかという思いです。記念館で行われた或る「語り部の会」の時、聴講者の方から、「原野を切り開く開拓と思って満州に行ったら、そこにはもう家も畑も用意されていて驚いたということだったが、そういった家や畑が元々は中国人のものであったということを知った時、それらの畑や家はどのように日本人の手に渡ったのか、中国人たちはどのように思っていたのか、そのことについて教えて頂きたい」という質問が出されたのに対し、元開拓団員であった「語り部」の老婦人は「あれは現地の中国人たちが友好的、平和的、協力的に分けてくれたものであると思う」と答えておられました。実際には、開拓とは言いながら、一部を除くその多くが、現地の中国人たちの家や農地を安い価格で、かつ半強制的に収奪し、日本人開拓団に分けられたものであることは多くの調査や証言等により明らかなところです。しかし、当時の開拓団員の方の多くが、また戦後今もなお元開拓団員の中の一部の方には、前述の通りのように思っている方もまだ多いところに満蒙開拓の当

時の欺瞞性があり、それ故にこそ、あのような多くの犠牲を出したということにつながっているのだと思います。

この満蒙開拓における欺瞞性は、満蒙開拓の加害性、そして多くの被害と大きく関連し ています。私たちはこの記念館の開館に際し、最後まで「満蒙開拓」という言葉を館名に 冠することに何度もの議論を重ねてきました。この言葉は、自分たちの大切な農地や家を 奪われた中国側の人々からすれば忌避すべき言葉であり、「開拓だなんて言うけれど、実 際には中国人の家や農地を取り上げて日本人開拓団に分け与えただけではないか」として、 彼らに言わせれば「満蒙開拓団」とは「侵略移民団」であったからです。しかし、我々が 「満蒙開拓」という言葉に拘(こだわ)ったのは、当時、国策として「満蒙開拓」という言 葉を用い、まるで無主の地である原野を開拓し自由に自分の物に出来るかのように信じ込 ませて全国から27万人もの開拓団を渡満させて、日中双方を含む多くの犠牲を出すこと となった。もしも、そんなことは当然に言わないであろうも、「開拓と言っているけれど、 本当は中国人の土地や家を取り上げてのもので、本当は現地の中国人たちは日本人のこと を恨んでいる」ときちんと伝えていたら、あんなにも多くの人が渡満していかなかったで しょうし、あんなにも沢山の犠牲を出すことも無かったと思います。被害の前に加害があ った、そのことをきちんと把握しない限り、同じ過ちを繰り返すこととなると思います。 「語り部」の皆さんの体験談の中で、「終戦時、沢山の匪賊が襲ってきた」という話が良 く出されます。しかし、そんなに満州に盗賊的な匪賊ばかりがいたはずもなく、ソ連軍侵 攻時、開拓団を襲ってきた中国人たちの多くは、日本人から家や農地を奪われたことを恨 みに思っていた農民たちでした。

このことに関して、つい先頃の「語り部の会」で、岐阜県から来られた或る「語り部」の老婦人の方が言っておられた言葉が印象的でした。この方は、渡満当時から「満蒙開拓って一体なんだったんだろう」と懐疑的な思いを抱かれていたそうで、「日本側の食糧増産等の都合で、他人の土地に強引に入っていって、自分たちだけが幸せになろうとしたのが根本的な間違い」と言っておられました。本当にその通りだったと思います。私たちにとっても学ぶことの多い、記念館での体験や出会い等ばかりです。

4. これからこそが本当のスタート

足かけ8年を経ての開館を果たし、今のところは順調な推移を見せている当記念館。しかし、運営の苦労はこれからこそであり、建設時こそ公的助成を頂いたものの、その時の条件として「開館後は自主自立でやっていく」とされており、民間運営による、入館料と御寄付だけを頼りの綱渡りの運営がこれからも続いていきます。私事ながら、両親が開拓団員であったところから、早くからこの問題に取り組み、記念館建設の言い出しっぺとして、本業との二足のワラジの中で当初から計画に携わってきて当方自身としても、非常勤無償の専務理事として力の尽きるまで、この記念館の行く末を見届けなければと思っています。

我々の力不足のために8年もの歳月を要してしまい、その間に記念館の完成を楽しみに、 僅かな老齢年金の中から私の手に寄付金を握らせてくれた人たちの中からも多くの方が鬼 籍にと入られてしまいました。私事にて恐縮ですが、元開拓団員であり、自らの戦後の国内での再入植、開墾の苦労の中から、改めて日本人に土地や家を取り上げられた中国農民たちの悔しさ、悲しさを思い知り、その反省の言葉を私に語ってくれた当方の父も記念館の完成を見ることなく旅立ってしまいました。しかし、こういった先立った人々や、遠く満州やシベリアの地で亡くなられた多くの犠牲者の皆さんの犠牲を無駄にしないためにも、「なぜ満蒙開拓の悲劇が起きたのか」を語り継ぎ、二度と悲しい犠牲を出さないようにしていくことがこれらの皆さんに対する鎮魂であり慰霊であると思っています。

この10月に、記念館の敷地内に設置された平和友好記念碑、阿部守一県知事に御揮毫頂いた「平和友好」という碑銘の下には、かつて周恩来首相が引用した「前事不忘、後事之師(前事を忘れず、後事の師となす)」という言葉が刻まれています。満蒙開拓の史実と反省を明日の平和のための大切な歴史の教訓として語り継いでいきたいものと思います。

この南信州・伊那谷の地から世界に向けて平和を発信していく、小さくともキラリと光る記念館として、今後もスタッフ、関係者一同頑張って参る所存でありますので、今後とも当記念館への御支援の程、どうか宜しくお願い申し上げます。皆様も機会がありましたら是非御来館ください。お待ち申し上げております。

(11月23日記)



(写真、左は方正の総会で挨拶する寺沢さん、右は館内で見学する人々)

鎮魂と平和の里

―阿智村の満蒙開拓平和記念館を訪ねて―

山田 敬三

所在地をホームページで調べたけれども経路はいま一つはっきりしない。地図を見たり 時刻表をめくったり、挙げ句の果てに記念館へ何度も電話して高速バスの乗り場を尋ねる ような始末であった。だが、そんな煩わしい問い合わせをいやがりもせず、事務局の方が いちいち調査して懇切丁寧に答えて下さった。お陰で満蒙開拓平和記念館へはスムースに 到着することができた。

といっても、私の住む神戸から記念館へまっすぐに行く道はない。初日は名古屋までJRの在来線と新幹線、そこから中央本線の南木曾へ乗り継ぎ、路線バスで馬籠峠を越えて島崎藤村記念館の近くにある民宿に一泊した。そして翌朝、宿の主が運転してくれた自家用車で中央高速道馬籠のバス停まで行き、そこから昼神温泉までは高速バス、下りた所ではあらかじめ教えられていたタクシー会社に携帯電話をかけて、やっと記念館にたどりつくという旅路であった。

専攻分野の関係で中国東北地方の文学に関心を持ち、旧満州国の文人たちが書いた作品について日中両国の関係者による共同研究組織を起ち上げ、日本学術振興会から研究助成金を受けて現地調査を行なった後、その成果を『十五年戦争と文学』と題して刊行したことがあった(1991 年、東方書店・中国語版は 1992 年、東北師範大学出版社『中日戦争与文学』)。ただし、研究対象となった時代に開拓民として「満州国」にいた人々のことについては全くの対象外であった。

本年4月、「満州開拓平和記念館」が長野の阿智村に開館されたという消息を耳にした時、すぐにでも訪れたいという気持ではあったが、雑用に紛れてのびのびになり、今回ようやくその願いが実現した。周り一面を田畑に囲まれた記念館の建物は、ひどく垢抜けのした瀟洒な平屋である。入り口の近くには「鎮魂」の二字が石に刻まれた記念碑、予算の関係で当初予定の規模からは縮小されたそうだが、それでもひときわ目立つ施設である。内部には視聴覚室や喫茶室をかねた休憩室も整備されている。

展示物の「はじめに」と記された文面には開館の主旨が簡潔に述べられている。本誌の 読者にはいわずもがなであろうが、展示の意図や陳列内容を過不足なく伝えたいい内容だ と思うのであえて全文を引用させていただくことにする。

中国東北地方にかつて13年間だけ存在した幻の国「満州国」。ここに日本から約27万人の農業移民が渡って行きました。「満蒙開拓団」です。昭和恐慌で疲弊していた農村の土地対策と人減らし、それにソ連からの防衛と現地軍隊への物資の供給といった軍事目的が合致し、国策として進められました。

"20町歩の地主になれる""満州は日本の生命線""拓け満蒙"。希望を抱いて渡った新天地。しかしその多くは、現地の人たちの農地を安く買い上げ立ち退かせたものでした。8月9日、突然のソ連侵攻で満州は戦場と化し、開拓団の人たちは広野を逃げ惑います。終戦後も祖国に帰ることができず、収容所では飢えと寒さで大勢の犠牲を出しました。

「満蒙開拓」とはいったい何だったのか。私たちはこの歴史を風化させることなく後世に伝えるため、その拠点として記念館をつくりました。戦争に導かれていく道筋を学び、人々の体験に耳を傾け、平和な社会とは何かを皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

かつての「新天地」に対するノスタルジアなどは微塵もない。現地民から取り上げた農地に「開拓」した過去への贖罪に近い気持、ソ連の侵攻をきっかけに続出した身内の犠牲者に対する痛切な鎮魂、そして平和への希求——それらがこの記念館設立の趣意だということが、本文だけではなく展示物の中身に強く反映されている。

なぜ他国にまで出かけて開拓民となったのか? むろん貧しかったからであるが、その 貧しさを利用して侵略の尖兵にしたて上げようとした戦時政策、その国策に乗っかって成 績をあげようとした役人や地元の有力者、たんたんと伝えられる事実からは、そうした国 策の犠牲になった人々のうめきが切々と伝わって来る。しかも、その犠牲者が同時に加害 者であったという複雑な当事者の思いである。今年 90 歳になる小木曽弘司さんは、そうし た思いを訥々と語っている。

開拓じゃないに。開墾したところに中国人を追っ払ってそこに入ったんだから。「お前たち出て行け」って。その後ろ盾には、日本軍がおったんだ。行ってすぐオンドルのあるあったかい家を授かったんだ。そこに入りながら自分たちの家を、中国人を使って造ったの。米は朝鮮人に作らせて、日本人は大豆やとうもろこしを作って供出したの。

こうしたなまなましい発言が視聴覚室の映像で見られるとともに、『証言 それぞれの記憶』と題して小冊子の形で記念館から刊行されている。曲がりなりにも政府間協定に基づいて派遣されたハワイやブラジルなどへの「移民」とは違って、旧満州での開拓は「植民」のための略奪農業であった。「開拓団」の「家屋や土地は、すべて当地の農民のものを強制的に占拠したものだった。」という中国側の証言(劉秉乾『私の知っている頭站村の「開拓団」』)iをまつまでもなく、満洲国の建国は他国領土内での侵略の産物そのものであった。そこでは「日本人が中国人を殴ったり怒鳴ったりするのは、日常茶飯事だった」といわれるii。

当時は一兵士として、現地の部隊に所属していた私の義兄(故人)は、戦争の犠牲者であったにもかかわらず、満州駐留時の思い出をよく懐かしげに語っていた。「匪賊」の襲撃を避けるためにどう武装したか、軍の食料をどのように確保したか。性について話すこ

とはなかったが、軍隊内にはむろん慰安所が開設されていたであろう。彼のいう「匪賊」 は日本軍の侵略と占領に武装して抵抗した現地の民衆である。

「13 年間だけ存在した幻の国」は、こうした加害者と被害者の錯綜する状況の中で構築されていた。そして「敗戦」という日本人にとっての悪夢が現実となった時、隷属を余儀なくされていた日常の民が衣替えした「匪賊」となって開拓民に襲いかかった。かつて兵庫の県立高校で社会科教員を勤めていた私の知人(橘雄三氏)が、私の記念館を訪問したというメールでの挨拶に、次のようなご返事をくださった。

私は、満蒙開拓団について、一時、深く調べた時期がありました。私が調べたのは、兵庫県の旧出石郡高橋村のことです。

この村からは、昭和19年第13次大兵庫開拓団を編成、479人が渡満入植しました。 そして、僅か一年半で敗戦、ソ連軍の侵攻と匪賊に追われる逃避行の末、298人が川に 身を投げ悲痛な最期を遂げました。村の神社の境内に殉難者之碑が立っており、碑の裏に は家族ごとに氏名が刻まれています。8人が死亡した家族もあり、読んでいて、胸が苦し くなりました。

このような事実のあったことは、同じ県内で生まれ育った私にも全くの初耳であった。 当地の出石(いずし)は蕎麦を名産とする農村地帯、つまり経済的には恵まれなかった地域である。阿智村が兵庫県にもあったこと、その記念碑が同村の神社に造られていることを、この場を借りてお伝えしておきたいiii。

実際に戦争を体験した人々が少なくなり、「満州」の開拓についても当事者がほとんどいなくなりつつある現在、日本の軍隊がアジアの国々に侵出したという事実さえ今では忘れられようとしている。開拓に従事した人たちは戦争政策の犠牲者であると同時に、中国側から見れば侵略の先兵であった。その事実を後世に伝えようとして「満蒙開拓平和記念館」は、この辺鄙な土地に建設されたのであろう。北朝鮮による拉致や日韓問題、尖閣諸島をめぐる中国との紛争を考える上でも、こうした過去への正確な認識があるかどうかが問われているように、私には思えるのである。

くやまだ・けいぞう:1937年生まれ。神戸大学名誉教授、日本現代中国学会顧問。著書に「魯迅の世界」「魯迅 自覚なき実存」「十五年戦争と文学-日中近代文学の比較研究」「境外の文化-環太平洋圏の華文文学」など>

i 西田勝ほか編『中国農民が証す「満洲開拓」の実相』(2007年、小学館)p. 109

ii 同上 p. 167

[※] 出石での開拓民については、《改訂『国策に散った開拓団の夢』満洲開拓団没後五十周年 忌》と題する専著(平成6年8月11日、但東町文化財調査委員編集・但東町教育委員会 発行)のあることを橘雄三氏よりご教示いただいた。

日本国長野県「満蒙開拓平和記念館」

の訪問レポート

ハルピン市日本残留孤児養父母連絡会

秘書長 石 金 楷

2013年6月25日、私たち「平和友好訪日観光チーム」一行5人は名古屋から長野県に行き「満蒙開拓平和記念館」を見学、記念館側の歓迎を受けた。

メンバーは:ハルピン市日本残留孤児養父母連絡会の名誉会長・胡暁慧、秘書長・石金楷、黒竜江省社会科学院歴史研究所研究員・車霽紅、黒竜江省テレビ特約評論家尚禎、日本残留孤児・郜鳳琴、通訳・房若林。

■閉館日だったが…

満蒙開拓平和記念館は日本国長野県下伊那郡阿智村駒場711-10にあり、2013年4月25日開館した。6月25日は閉館日だったが、私たちの訪問を知って特別に開館してくれ、河原館長とスタッフ全員が私たちの訪問を歓迎してくれた。

午前10時頃、私たちが2時間半乗った長距離バスが長野県駒場駅に着くと、記念館の 専務理事・寺沢秀文先生たちが車で駅まで迎えに来てくれていた。

記念館の会議室で館長の河原進先生(飯田日中友好協会会長)が歓迎の挨拶をされた。 今日は閉館日ではあるが、数日前から皆さんをお迎えする準備は整えていた、そして私たちの会が、この記念館の準備期間中に示した関心と支持に感謝を表明され、私たちが行った『中国の母(残留孤児の養父母)の大きな情愛』展を高く評価された。

歓迎会の席で連絡会の胡暁慧名誉会長が「中国侵略日本軍第731部隊罪証陳列館」を 代表し、この記念館に『日本軍細菌戦図集』、残留孤児の回想録『和一水』、平和の皿、平 和扇、記念バッジなど、資料と記念品を贈った。そして記念館側は「中国養父母・残留孤 児資料センター」に関係資料とお礼の品を贈った。

胡暁慧名誉会長は連絡会を代表して挨拶をした。彼女は記念館の周到な展示に感謝を表明し、満蒙開拓記念館を高く評価、今後双方が民間の友好交流を進めたいという希望を表明した。

■説明文と映画で

歓迎会の後、私たちは記念館を見学した。建物は2006年に準備を始めた。発起人は

長野県飯田日中友好協会。敷地面積1455平方メートル、展覧館の面積は440平方メートル、運営はボランテイアである。展示は時間の流れを追いながら、テーマごとに戦前から戦後にかけての満蒙開拓史を紹介している。写真、資料、映像などによって「戦争と満州を理解できない若い世代を、あの時代に連れ戻す」ということであり、同時に、満州開拓団の体験者の証言を、文章を読み、映画を見るという二つの方法で展開している。

その内容を簡単に紹介すると:「中国の東北地方で、13年に及んだ幻の王国――満州が存在した」。ここで日本は約27万人の農業移民を行った、すなわち満州国である。これは人々に「20町歩地主になれる」、「満州は日本の生命線」という夢の新天地だった。だが1945年8月9日、ソ連の突然の侵攻は満州を戦場と化し、開拓団の人たちは荒野に逃れた。戦後になっても帰国できず、難民収容所で多くの人たちが飢えと寒さで死んだ。中日双方におびただしい犠牲を強いた「満州開拓」とは結局、何だったのか? 私たちは歴史と向き合い、後世の人たちに歴史を知らせるために、この記念館を創った。戦争を引き起こしたその結果を学び、人々の体験に耳を傾け、何が平和な社会かを、みんなで考えよう」とある。

■展示は8つのパートで

展示は8つのパートからなっている:

- 1、序章――時代を洞察するタイムトンネル。満蒙開拓団を送り出した時代背景、開拓団 住居の再現、青少年義勇軍に関する展示。
- 2、上陸――当時の満蒙開拓団の映像資料(約3分間)
- 3、新天地満州――希望の大地。義勇軍の出発。少年義勇軍が満州から日本の家族に出したはがきなど。
- 4、敗戦と逃亡――絶望の彷徨。ソ連軍侵攻後、開拓団避難の旅、三石忠勇のデッサン。
- 5、証言――それぞれの記憶。貼満原開拓団各団員の証言、文章の部屋。
- 6、撤退・再出発——失意の帰国。戦後日本への返送、そして戦後の苦しい生活。元義勇 軍田辺良三のデッサン。
- 7、望郷——山本慈照と残留孤児。残留孤児と残留婦人に対する山本慈照の支援活動の記録、残留孤児の手紙の展示。
- 8、平和な未来に向かって現在私たちができること。参観に来た人たちの感想。伝言。

記念館には喫茶室、会議室(資料室)があり、記念館の東側の庭園には慰霊碑がある。この記念館は日本で初めて満蒙開拓の内容を専門的に紹介した記念館である。8年の準備を経て、民間団体が主導し資金を集め(集めたカンパ5,000万円)、最後には長野県からの補助(6、000万円)を得て今年4月25日、完成し、オープンした。開館後は完全な自主運営であり、役所からの補助はもう受けない。(入場料は大人500円、学生300円)

■会員の会費でまかなう

この記念館の建設を考えたのは民間の団体、飯田日中友好協会である。この会は日本日中友好協会の外郭団体でも下部組織でもない。また国から補助も受けておらず、完全に会員が納める会費によってまかなわれている。この会ができたのは1963年、大多数の会員は中国の東北地方へ行ったことがあり、多くの子供たちが中国人に育てられ、かつては中国で残留孤児を探す組織を作ったこともあった。

歴史を直視し、間違った歴史を2度と繰り返さない、平和で美しい未来を創る、というのがこの会の趣旨である。毎年6月30日と7月2日、二つの行動を行っている。一つはシンポジュームの開催、もう一つは学校へ行って講座を開き、歴史および中国人民の恨みに報いるに徳をもってする、その例として残留孤児を育ててくれた話をする。この会の中国残留孤児と残留婦人に対する援助活動はもう50年も続いている。

この会がある飯田および下伊那郡地区は開拓団員を最も多く出した地区である。このことがあって歴史を反省し、2度とふたたび、あの歴史の過ちを繰り返さないために2006年、この記念館の建設準備を始めたのだった。

記念館建設の目的は「満蒙開拓団の体験を通して、次の時代に戦争の悲惨さ、平和の貴重さを語り伝える」ものであり、満蒙開拓や旧満州の存在の合理性を美化するものではない。

この記念館の基本的な立場は「満蒙開拓は被害と加害」の両面の歴史テーマである。したがってただ開拓団の犠牲と被害だけではなく、開拓団もまた日本の中国侵略に関わった、この基本認識も終始一貫している。ただし、展示空間が限られていることや資料不足などの理由から、展示の内容が十分ではない。今後、展示内容に追加と改善をやっていきたい(寺沢秀文専務理事)

■昼食を食べながら

見学が終わってから記念館側の配慮で一緒に昼食を食べ、その中で中国帰国者の状況について、さらに説明を加えてくれた。統計によれば、長野県の身分が判明し、帰国して定住した残留婦人と残留孤児は416人、それに彼らの配偶者および2世、3世を加えると総数は4158人に達する。長野県「中国帰国者支援交流会」は毎年、総会を一回開くほか、所轄の市や郡でそれぞれ1年を通して高齢者と2世、3世向けの日本語教室を開き、専門の教師が教えている。

午後開かれた座談会で、胡暁慧名誉会長は見学した感想を述べ、記念館が中国養父母と 残留孤児とに関する紹介を増やしてほしいと提案し、現在中国で行われている『中国の母 の大きな情愛』展および養父母連絡会の状況を説明した。石金楷は731陳列館の世界遺 産に登録申請している状況を紹介し、日本側が731陳列館を訪問して友好交流を進めた いと招請、記念館は喜んで招請に応じた。黒竜江省社会科学院歴史研究所研究員・車霽紅 が挨拶、彼女は記念館が、戦前日本が中国東北地方に移民したこと、そして満蒙開拓団が 「被害」と「加害」双方を行ったとする歴史認識を讃えた。

黒竜江省テレビ招請評論員尚禎也も参観の感想を語り、記念館の完成にお祝いを述べた。

■長崎大・南誠さんの支援活動

名古屋で私たちと落ち合って一緒に長野へ同行した長崎大学の南誠先生は、残留婦人の孫である。2007年に私たちの連絡会と交流するようになった。彼は遼寧省社会科学院歴史研究所・張志坤、関亜新の著書『日本残留孤児調査研究』の日本語翻訳者の一人である。そして満蒙開拓平和記念館の建設にも関わった。日本側の通訳として、今回私たちの交流視察にも大きな力を貸してくれた。彼が語ったところによると、長野県が設立した「中国帰国者定着促進センター」がすでに長年の使命を終え、その仕事が埼玉県の帰国者支援機構(訳者注:埼玉県所沢市にある厚労省の中国帰国者定着促進センター)に移行され、その時に多くの重要な文献・資料が満蒙開拓記念館に無償で贈られた。彼はかなりの資料が重複していたり、すでに記念館が収集済みのものであることを発見したりした。彼は記念館の求めに応じ、休みを利用して資料の整理を手伝った。彼は記念館側と話し合って重複している関係資料を「中国の母親の大きな情愛」展に寄贈してもらうよう努力すると言っている。これに対し私たちは彼に感謝し、郵送費用を負担したいと伝えた。

■未判明孤児の朗報

日本へ行く1か月前、私たちはハルピン市の残留孤児・郜鳳琴の資料を朝日新聞瀋陽支局で翻訳の後満蒙開拓記念館に送っておいた。今回、私たちが記念館を訪ねた時、嬉しいことに記念館の専務理事・寺沢秀文さんが民間に委託された直系親族を探す調査員を通して、私たちが提供したデータに基づいて、郜鳳琴の日本の親族の手掛かりをつかんでくれた。郜鳳琴はとても感激した。寺沢秀文さんは残された問題について引き続き全力で手伝うと言ってくれた。

午後3時頃、私たちは見学を終了、記念館の責任者は私たちが贈った関係資料と記念品に対して感謝を表明され、関係する資料を陳列し永久保存しなければならないと言われた。 双方の全員の記念撮影をし、別れがたい気持ちで手を振り、別れた。

今回の見学を通して私たちはこの記念館のテーマが鮮明であり、展示品がリアルで本物であり表示の仕方が理に適っていると感じた(見る、聞く、読む、触るという方法で、見る者をその中に引きこまずにおかない)。歴史認識の問題では「被害」と「加害」という両サイドからの歴史テーマを貫いており、これは大変貴重である。難を言えば、この記念館の場所が少し交通に不便であることと、規模が中小型であること。

■予想を超える見学者

今後、お互いに交流と共同作業を強め、展示品と資料の上で有無を通じ合い、できれば 双方がお互いの会場で交流展を行うことを提言した。前にも述べたように、この記念館は 日本で初めて満蒙開拓の歴史を紹介した記念館であり、長野県はまた日本で開拓民を最も 多く送り出したことからこの記念館は唯一、民間に基礎を置いた豊富な内容を持っている。 オープンして2か月で4000人を超える人が見学した、これは当初の予想をはるかに超 えるものである。時間がたつにつれて、この影響とさらに発展する勢いは決して小さくな い。そのため、適当の時期に、友好的な交流を深めるというよりは、むしろ友好展示館を 結成した方が双方の発展にとって積極的な推進作用をもたらすだろう。

2013年7月6日

【付記】日本にいた期間、「中国帰国者扶桑同心会」、「千葉県帰国家族支援会」、「東京中国歌舞団」、「日中友好の会」、「茨城日中友好協会」、それぞれの責任者と交流を行った。また孤児である作家・長安伊知子、著名な友好人士・吉崎聆子、松田桂子、日本の友人・吉沢次郎、大泉拓南さんらと会い、記念品を贈った。

(日本語訳 奥村正雄)

叔母家族の終焉の地を訪ねて

中嶋 定和

私の実家は長野県中野市赤岩(戦前は長野県下高井郡科野村)です。

私が幼かったころ、祖母に連れられて墓参りに行った時、お墓の端に石が3個置いてある場所がありました。

祖母がその所にも線香や花を手向けて祈っているのを不思議な思いで見ていて、その後 もずっと気になっていました。

成人して実家を継いだ長兄に疑問をぶつけたところ、旧満州(東安省宝清県万金山高社郷)に入植し逃避行中に佐渡開拓団跡地で自決した叔母と幼子2人のためのものだが、彼の地で生きているのではないかとの祖父や祖母の思いや願いが有り、墓石を建てていないとの事でした。(数年前に建立しました)

そんな事で、一族の誰かが自決した場所に赴いて祈りを捧げたいと思っておりましたが、 今春、縁あってその思いが実現し万感の思いでありました。

以下その訪問記です。

昨年3月会社を退職した折に仕事でお世話になった(株)シー・アイ・シー社の芳賀社長さんと会食した際、何か心残りな事がありますかと尋ねられて、私的な事ではあるが叔母家族の自決した旧満洲を訪ねたいとお答えしたところ、芳賀社長(山形県庄内町出身)さんも同じような境遇であった事が分り一緒に旧満州に行こうとの話になりました。

それから、実家の長兄に調べてもらったり、ネットで佐渡開拓団跡地を調べたり、満鉄路線図等を調べて、佐渡開拓団跡地は当時の三江省勃利県勃利(現黒龍江省七台河市)辺りだと分かり、芳賀社長さんのご尽力で車や中国人ガイドの手配をいただき実現した次第です。

5月28日(水) 仙川国際空港経由でハルピン空港着、ガイドさんと共に高速道路経由で牡丹江市に向かう。

延々と続く丘陵地の畑が印象的でした。

5月29日(木) 牡丹江市から麻山事件の地へ向かう。麻山ICで高速道路を降りて一般道で目印の石碑を探すが見つからず、農家を訪ねて案内してもらい、やっとたどり着きました。記念の石碑は尖閣諸島問題が発生した折に破壊されたとの事で、寂しい思いを中国人ガイドさんも含めて感じました。

その地のすぐ傍を川が流れ、線路があり水田もありましたが、少し離れた事件の地は丘の畑の中腹でそこからは延々と続く丘陵地の畑が印象的でした。

一行全員でお祈りして、芳賀社長さんの叔母さん家族が入植されたと思われる東安省庄 内村(現黒龍江省鶏西市庄内村)へ向かいました。

駅から直ぐの村の入口にアーケードが有り、ペンキが剥げていましたが、庄内村と読め、 皆感動しました。庄内村は延々と続く水田地帯で皆驚きました。(皆、山の中の村だと思っ ていたので)

そして、私の叔母達が自決したと思われる勃利へ向かいました。

高速道路の車中で中国人ガイドさんに何げなく佐渡開拓団跡地を知っているか尋ねたと ころ、記憶は定かでは無いが、何年か前に法要で訪れた長野県の団体を案内したとの事で、 早速、行先を勃利から七台河市に変更しました。

今になっても何で急に尋ねたのか思いあたらず、きっと叔母さん達が呼んでくれたのだ と思い不思議です。

七台河市はロシア風のビルやマンションが建ち並び、とても異国情緒のある美しい街で した。

ガイドさんの記憶を頼りに街中から 10km 程離れた所から、更に延々と続く畑の先の丘陵地辺りが佐渡開拓団跡地との事で、叔母さんと幼子 2 人と一緒に亡くなられた多くの方の冥福を祈り、帰りたかったであろう故郷の事を語りかけました。

それから、長兄から預かった実家の庭の土、数珠、子供たちへの郷里のお菓子等を捧げようと探しましたが、一面畑のため、適当な所が見つからず思案の末に、近くにあった湖のような桃山ダム(戦前は無かった)に捧げる事にしました。

夕暮れが近づいていましたが、何とかダムの湖面まで下りて長兄から預かった数珠などを水面に捧げ、叔母さんと幼子二人の魂が、桃山ダムを下り→松花江→黒龍江→ウスリー川 (ロシア) →日本海→信濃川→千曲川→夜間瀬川→実家裏の小さな水路・・をさかのぼって実家に帰れるようにお祈りいたしました。

ちょうどその時に、曇っていた西の空が裂けて真っ赤な大きな太陽が顔を出し、夕日が神々しく感じました。同行者の皆さんから中嶋家の思いが叔母さんと幼子二人に通じたと言われて感無量で涙が止まりませんでした。

こうして、中嶋家の永年の思いが実現いたしました。

5月30日(木) 牡丹江市からハルピン市方正県方正にある、「日本人公墓」に向かう。 尚志ICで高速道路を下りて方正に向かう一般道の両側は延々と続く水田地帯でガイドさん の話では戦後、日本人農業技術者の指導で稲作が出来るようになり、今でも感謝されてい るとの事でした。 方正の街で「方正友好交流の会」の大類事務局長様お手配の現地の方と落ち合い「日本 人公墓」まで案内頂きました。

延々と続く水田を見下ろす丘の斜面の木立の中に「日本人公墓」はありました。

広大な敷地の中には立派な公墓の他に、各県の慰霊の木の立札も沢山あり、皆で冥福を お祈りいたしました。

なお、写真撮影は尖閣諸島問題後は禁止になっているようでした。

今回、旧満州を訪れて親族やアジアの国々との不幸な歴史を振り返り、これからも平和な付き合いであってほしいと思いました。

最後に訪問の手配と同時にご一緒頂いた(株)シー・アイ・シー社の芳賀社長様、芳賀 常務様、渡邉常務様、中国人ガイドの皆様、そして「方正友好交流の会」大類事務局長様 に厚く御礼申し上げます。



(写真:麻山事件跡地にて。左端が中嶋さん)

<なかじま・さだかず:1948 年生まれ、千葉県浦安市在住。元・三井不動産㈱勤務。現在、NS コンサルテイング代表取締役>

あの頃のこと

福井 以津子

「皇紀ある紀元二千六百年」と日本中が旗行列・提灯行列と国民が躍らされていた昭和 十五年、私は女学生の一年生になったばかり。校長先生のお話はいつも長く、今は「非常 時」「銃後の護りは女子の役目」というお言葉を聞かされていた。

東京大空襲

日支事変(編集部注:盧溝橋事件を発端とした日中戦争に対する当時の日本側の呼称)は昭和十二年からずるずると長びいていた感もあり、「親戚のご子息が戦死された」と言った話なども聞こえてくる。米国との関係も不穏な感じであったが、とうとう昭和十六年十二月八日、太平洋戦争へと突入。早朝のけたたましいチャイムと共に臨時ニュースで「米英と戦争状態に入れり」と報じられた。地図で見る小さな日本が米英(インドをはじめ多くの植民地を持っている)と戦うとは、いくら神風を期待しても勝てるのだろうか。

消極的な私は不安になり、庶民の生活はますます苦しくなってしまうのではないか。闇の値段は毎日のように上っていくのを母を通じて感じていた。八ヶ月になった子を連れて三番目の姉は埼玉に疎開していたのに昭和二十年の正月は東京で迎えたいと帰って来てしまい、そのまま三月まで東京に居た。

私は戦争が烈しくなった四年生の頃、学徒動員という言葉どうり勉強は全くせず、そのうち葛飾区四つ木にあった工場の寮に入れられ、二週間に一日の休み(電気のこない日)があったがその日、我が家に帰り一泊。三月八日の夕方は家に帰り、夕食は両親と三番目の姉と子供と夫、たまたま長姉の夫(当時、長姉夫婦は大阪市に在住していた)も上京し、鳥をさばき、いつもはお米と交換していたお酒を出し、最後の食事とも知らず楽しい夕食をとった。明くる九日の夕方私は寮へ戻ったが、その数時間後に終の別れが待っているとは。

しかし、何か予感はあった。私は自分のアルバムを寮へ持ってゆくか、いやいやそれは 家が焼けることに繋がる、と持っていけなかった。九日になって父は晒の腹巻を出し、そ の中に住所氏名、血液型、少々の現金と預金通帳番号、生命保険、火災保険の番号を書い たメモとお守りを入れてくれ、「これが役に立つようでは困るが」と言いつつ、「荷物もあ ちこちに疎開させたが、これも何処かに何を送ったか書いておくからなあ」とひとり言の ように言っていた。そしてその夕方、私が寮へ帰る時刻となり、「さよなら」と言うべきか 「行って参ります」と言うべきか、あの夕方に限って迷った。

姉が「あんたお母さんにさよなら言ったの」とうながされたのも不思議でならない。母は沖縄方面に行っている兄を心配していたが即座に、「戦争に行っている人を心配しても仕方がないでしょう」と姉にたしなめられていた。悲愴な会話であった。

寮に戻ればお米を冷やして炒って塩をふったもの、芋などを出し合いしばしおしゃべり。

警報もなく眠りについた。それも束の間、突然の空襲警報ですぐに飛行機の爆音がした。 暗がりのなかトイレに入ると何やら光が見え不吉な感じがした。爆風で窓ガラスが割れる 事を避け、はずして廊下に敷き、防空壕に入った。爆音はいつもと異なり、恐怖の連続で あった。

「案じています・・・連絡を乞う」

やっと解除のサイレンを聞き地上へ。東京の空は真っ赤でこれは大変な事になったと感じた。が眠いのが先で床に入ったが何故か両親と姉の顔がちらつき朝を迎えた。

工場の屋上に上がってみると四ツ木大橋を焼け出された人々が列をなして全身真っ黒になって千葉方面に避難して行くのが見えた。そのうちに、友人のご両親が寮を探して来られ、コートは焼穴だらけ、顔は真っ黒、眼は真っ赤、焼け焦げた異様な匂い。娘の無事を確認して涙の対面をされていた。私たちはそれに刺激され、教師の制止もきかず、我が家を案じ飛び出して行った友もいた。

私は行く勇気もなく苦しい数日がたった。千住に嫁いでいた二番目の姉が工場に尋ねて来た。そして両親と三番目の姉とその子どもの安否が未だ知れず、と言う。伯父(浜町三丁目に在住)も尋ねて来てくれたのに、両親が来ないのはおかしいと思った。伯父は、明治座付近で両親と会ったのにはぐれてしまったという。今まで消息が分からぬと言う事は最悪の事態を覚悟しなければと思うと言う。涙のとまらぬまま焼跡へ行こうと押上まで電車で行き、浅草から焼野原を歩き我が家に着いた。

親戚、知人より「案じています・・・連絡を乞う」と板切れが立っていた。近所の方々もやはり「皆さん一緒に明治座へ逃げたらしい」と。そして明治座の遺体は十思小学校に運ばれたと聞き、また歩いた。鯨幕が見え、風が吹くと黒いマネキン人形が何列も並び足がすくんだ。中に入って両親と姉、そして一歳に満たない彼女の子を探す勇気も出なかった。そこへ知人の在郷軍人の方に会い、その方が「お父さんと姉さんもこの中に居る筈だが分からない。でも貴女の両親はよく知っているから」と言って幕の中に入って探してくれた。しかしやっぱり判断出来ず、後日油紙を持っていき遺骨の代わりに、そこの土を四つに分けて晒の布に包み、次姉の家に戻った。私は学校どころではなく長姉の夫が、学校なんて卒業しないでよい。大阪へ行こうと言ってくれた。

大阪で姉と涙の再会

罹災証明書で大阪まで無料で行き、やっと長姉と会った。電話も電報も簡単に打てなかった混乱の時期であり、長姉は「やっぱり駄目だったの」と、また抱き合って泣いた。京都府下の叔母から電話があり、「東京の二の舞を踏んだら大変だから取りあえず、子供たちを連れて私の家に来なさい」と電話があり、身の回りの物を持って長姉は甥を背負い、姪二人を連れ、私も一緒に奈良に近い叔母の家に行った。

山の美しさ、木津川は滔々と流れ、これだけを見て心はいやされた。叔母の家の納屋を 掃除し、茣蓙を敷き壁に紙を貼り、何とか住めるようになった。私も遊んでいては徴用さ れるからと村役場に勤めさせてもらった。

役場の方に慰められれば、また涙、しかし空襲はなく、役場の兵役部の係りは忙しく、 まして戦死の知らせ、召集令状を配布するなどの部署の方々は大変だった。

八月十五日は、皆で起立してラジオを囲んだ。意味はよく分からなかったが、「忍びがたき」というお言葉に兵役部の人も私たちも皆泣いた。私は、両親はこの放送を聞かないで幸せだったかもしれないと思った。

その後役場には米兵が来た。女性は小使室に逃れたが、米兵は真摯な態度であったと聞いた。まさに敗戦の実感である。

京都市内は焼けていないので繁華街は米兵と腕を組んで楽しげに談笑する日本女性が見られ、世の中変わったと情けないような悲しい思いをした。

ラジオからはジャズが流れ、フォスターの曲も懐かしかった。英会話の平川唯一先生の 英会話のテキストを求め、抵抗なく学んだ。

戦後も六十八年、今や戦争を知らない人々がほとんどかもしれない。しかし沖縄をはじめ日本全国に数多くの米軍基地を抱え、超大国間の核拡散などで地球は汚染されている。

戦争体験者はますます少なくなり、思い出すこともつらいが、あの頃の事は鮮明に思い 出され、その一端を縷々したためてみた。



(写真: 昨2012年11月、コーラスグループの発表会で独唱)

< ふくい・いつこ: 1927年、東京・浜町(中央区、当時は日本橋区)生まれ。書道、篆刻、俳句、コーラスなどを趣味とし、弁護士秘書を務めていたが15年ほど前に退職。港区高輪での長いひとり暮らしを経てこの10月、八王子市の介護付き有料老人ホームに入居した>

この冬、最後の方正ロケへ

映画「祖国をひと目みて死にたい」(仮題)

政府が孤児と認めない 徐士蘭さんの 夢をかなえた人たち

奥村正雄 わたしの方正之路①

■ あの映画はまだか!?

最近、夜中に目が覚めると鋭い声が聞こえて ハッと身構えることがある。

「あの映画はどうなったんだ! 徐士蘭さん は元気なのか?」

徐士蘭さんとは、日本政府から残留孤児としての物的証拠がないという理由で孤児と認定されない女性(推定72歳)である。その彼女が2年前の6月、さまざまな障害を乗り越え、多くの人のカンパと声援を得て彼女の悲願「祖国をひと目見て死にたい」が実現した。その一



部始終を支援スタッフの中心となった4人(吉川雄作、飯白栄助、是洞三栄子、奥村正雄) の一人、吉川雄作さんが記録してきた。

この記録映画に欠かせない部分<厚生省に日本人孤児と認定されない女性を、短時日(10日間)とはいえ、祖国の日本政府が許してビザを発給してくれるかどうか…>これが焦点だった。これを乗り越えるためにどんなハードルがあったのか? それは確かにさまざまな段階で私たちを当惑させ、それを乗り越えるには何が必要だったのか…。今考えれば懐かしく振り返られることも、あの時は「ああこの壁を乗り越えるのは、やっぱり無理なのか?」と悩んだことも1度や2度ではなかった。それはやっと念願かなって来日のビザが下りた瞬間にも、私たちを押しつぶそうとしたものが目の前に立ちはだかった。降って湧いたあの東北大震災の成り行きが全く見えない段階で、下りたビザの有効期間のどの10日間と決めるべきか、という決断を迫られた場面…などなど。

実は今、この映画の最後の重要なパート、厳冬のハルピン、方正で彼女がビザ取得の手続きで苦労を重ねたシーンを撮り、ほかに2,3の挿入シーを撮って1本にまとめる、という進行状況である。しかしその完成までにはもう少し時間が必要だ。そのため、この辺でビデオの一部を見てもらおう、ということになった。その一部試写会の日程と会場は次の通りだ。

- ◆東京会場 1月12日(日)午後1時30分から
 - 東京都千代田区神田小川町3-6 方正友好交流の会会議室
- ◆千葉会場 1月17日(金)午後1時30分から 千葉県生病院友の会・会議室 *問い合わせ・090-8043-6043(奥村)

■読んでもらえなかった航空便

残された最後の撮影シーは「来日までの、さまざまな壁」だ。分けても徐士蘭さん家族が来日ビザの申請手続きのために、方正からハルピンまで真冬の高速道185キロを何度も往復しなければならなかった場面だ。それも、今日は申請書類のここに不備があって出直し、明日はこの証明書が必要、というようなものではなかった。窓口の理由不明の長い待機や出直しなど…で、わけもなく手続きが進まない日が続いたのだ。

ある時は私がいらだち、当時、黒竜江省外事弁公室の王英春副主任に「早く申請手続きが進むよう、取り計らってほしい」という手紙を送った。彼は黒竜江省大学で日本語を専攻した後、省の外事弁公室日本処に入った。その後、新潟県、新潟市と黒竜江省、ハルピン市との友好姉妹都市という縁で新潟大学に2年間、留学した。この時交流があった縁を思い出し、事情を手紙にしたため、航空便で彼に送った。経緯を説明し、なんとか手続きを進めてほしいという内容だった。ところがいくら待っても事態が進まない。私のイライラが募っていた時、彼が出張で新潟市へ来たというニュースが新潟の友人から入った。私はその晩、すぐ彼が宿泊している新潟市内のホテルへ電話を入れた。ところが彼は私の手紙を見ていないことが分かった。多忙な彼のデスクには、さまざまな書類が山積みされ、私の手紙を選んで読む暇がなかったのだ。

私はすぐ別の方法に切り替えた。徐広明さん、黒竜江省外事弁公室で王さんより先輩で、日本語の能力は群を抜いていたが、省内の人事力学で閑職にいる知人だ。この判断はずばりと当たった。彼は連日、省内の関係窓口へ出向いて、手続きを進めてくれた。このころ北京の日本大使館に出向していた厚労省中国残留孤児等対策室のSさんと連絡を取り合っていたが、このことを彼に話すと、彼からハルピンの徐さんに電話をかけてくれ、手続きの進捗状況を聞いてくれたりした。徐士蘭さんのビザ取得手続きのことで、直接かかわる重要な話ではないにしろ、日中の関係機関の二人が言葉を交わしたことで、私ははじめて実感としての手ごたえを感じた一瞬だった。

■桜は絶望に……

徐士蘭さんの訪日ビザの申請から瀋陽の日本総領事館でビザが発給される時間について、私たちは政府関係者の話から「書類が領事館に回れば、あとは 1 週間」と計算していた。しかし、黒竜江省での手続きに意外に手間取った。その上、書類が領事館に回ってからビザの発給が 1 週間から 10 日になり、20 日になり…、今か今かと待っていた私たちは、さまざまな準備を変更したり、先送りすることに追われ始めた。

まず、大きな誤算の一つは桜の満開の時期に西伊豆の民宿で桜と富士山を見せたい、と 3 月末の日程を組んでいた。富士は逃げなかったが桜は絶望になっていった。二人を宿泊させるために予約しておいた千葉市美浜区のホテルをキャンセル、歓迎会を予定して頼んでおいた千葉と東京の会場もキャンセル。それも新しい来日予定が 1 カ月後なのか半年後になるのか、全く予想ができなくなった。

「瀋陽の領事館に書類が来ているのに、結局発行しないなんてことはないよねえ」 スタッフの一人は、そんな気弱な発言をして、みんなに冷水を浴びせた。

■「預金残高を増やすように」

ある土曜日の午後、瀋陽の領事館から銀行残高を知らせるよう連絡が入った。いろいろな方からカンパが届き、必要な経費を極力抑えてきて、この時、銀行残高が80万円くらいだった。そう答えると「あと100万円積み増してください」という。そこであわてて一時、知人から借りて言われるように残高を創った。その通帳残高を撮影してスキャナーで瀋陽領事館へ送った。土曜日の午後3時少し前だった。

「これでクレームが来たらどうしよう!?」

「ナントカ友好協会とか日中手をつなぐナントカとか、そういう団体ではないしね、あとで面倒なことでも起きたら大変だからね」

「ここまで遅くなったのも、果たして俺たちを信用していいのか迷ってたんだね」 「うん、素浪人4人だからね」、

吉川さんと顔を見合わせた。

「とにかくビザ決まりだ!」

二人はわが家の安いお茶で乾杯した。

■ 10 日間に賭ける

3月21日、待ちに待ったビザが出たと、中国の徐士蘭の孫娘・孫洪波からメールで知らせてきた。東北大震災の10日後である。ビザの有効期限は3か月、この間、大震災がどういう災害を日本に残し、さらに日本中が混乱に陥らないとも限らない。しかし迷うこともしばらく様子を見ることもできない。決めるほかなかった。ビザの有効期間3か月。

「有効期間最後の 6 月中旬の 10 日間に決めよう。その時、日本が徐士蘭を迎えられる状況にあるかどうかは、だれにも分からない。いまはこの 10 日間にかけるほかの選択肢はない!」という結論になった。

幸い、この賭けは天に裏切られなかった。

<おくむら・まさお:1931年新潟市郊外生まれ。方正友好交流の会参与>

ハルピン氷祭り、詳細ともう一つの意味

奥 村 正 雄 わたしの方正之路 ②

■ 年々雄大に

ハルピンの氷祭りは1906年に始まっていますから、一世紀の歴史を持つ世界的な氷祭りです。しかし、世界の観光客が集まるようになったのは1946年、抗日英雄・李兆麟を埋葬した兆麟公園で開かれるようになってからです。世界の氷彫刻家たちが集まって氷の芸術を展示するようになりました。



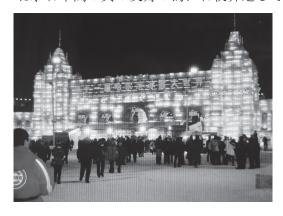
日本からも、札幌から「氷の名工」たちが、毎冬ハルピンへ行って、その技を競ってきました。これを見る観光客も、日本をはじめ、まだ雪や氷を見たことがない中国の南の省や香港、東南アジヤ、アメリカ、カナダ、オーストラリヤなど年々多くなってきました。

年ごとに盛大になってきたハルピンの氷祭りは、発祥の地、兆麟公園では作品が収まりきれなくなり、その近くを流れる松花江、さらにその対岸にある観光地・太陽島でも、さまざまな催しが繰り広げられるようになりました。たとえば、厚さが1メートル以上にも氷結する松花江の氷を切って天然のプールを作り、そこで寒中水泳、沖の方では氷上ョット、氷上雑技など、ほかほかカイロをセーターの下にしのばせれば時のたつのも忘れてしまいます。

■ 真の友好は市民の間から

このところ日中関係の緊張がマスコミで報じられています。しかし緊張をあおっているのは両国の政治家だけです。中国の一般市民は緊張なんてどこ吹く風、むしろとても友好的です。

今年の方正友好交流の総会で記念講演していただいた元中国大使の宮本雄二さん は、日中間の真の友好の為に日夜奔走しておられますが、両国の緊張緩和と友好促進



にとって、いま最も大切なのは両国の友人 の間、市民と市民の間の友好を広げてゆく ことだ、と言っています。

今回の氷まつりのツアーは、それを体で確かめる絶好の機会でもあります。氷祭りを楽しみ、市民同士の友好を確かめ合えるなら、これほど時宜にかなった旅はない、と言えそうです。 *写真は Wikipedia より

ハルピン氷祭りの旅(2014)

■日程

1月22日(水) 新潟空港ロビーに集合 10:00

空港発 (CZ616便) 12:15

ハルピン空港着 13:40

宿泊=シャングリラ(香格里拉)ホテル

23日(木) 市内観光

夜、兆麟公園氷祭り見学

24日(金) 731部隊記念館見学

夜、氷雪大世界見学

25日(土) 太陽島の氷祭り見学

中央大街見物と買い物

26日(日) 帰国(CZ615便) 8:05

新潟空港着 11:15

空港ロビーで解散

*日中それぞれ現地時間、中国は日本の1時間遅れ

- ■定員 15名
- ■会費 150,000円(旅行保険代含む。なおシングルの宿泊ご希望の方は10,500円プラス。集合、解散の新潟空港までの交通費は含まれていません。
- ■申し込み 1月10日までに下記奥村までお申込みください。
- ■会費の払い込み 振込用紙をお送りしますので1月15日までに指定の口座 へお振込みください。

方正友好交流の会・ハルピン氷祭りツアー班 旅行の問い合わせ 奥村正雄

電話 043-272-9995

FAX 043-272-0214

「満蒙開拓平和記念館」を訪ねる

一泊二日の下伊那の旅

ご承知のように、全国で最も多くの「開拓団」を送り出した長野県南部に「満蒙開拓」に特化した記念館が開館しました。どんなに言葉を尽くしても表現できない敗戦後の逃避行の悲惨さ故に、ほとんどの体験者は沈黙してこの世から去って行きます。その意味で、当時の「満蒙」に関する記念品が陳列されている「満蒙開拓平和記念館」の存在の意味は本当に大きいと思います。日帰りでなかなか時間的な余裕がありませんが、1泊2日で旅する企画を立てました。参加者同士が交流しながら、満蒙開拓の実情を認識しましょう。ぜひ、ご参加を!

日程

3月7日(金) 新宿駅西口発 専用車 7:30 長野県・飯田市へ

談合坂 昼頃 バス車内で DVD 鑑賞 途中

サービスエリアで休憩

飯田山本 IC 着 昼食

記念館着 <満蒙開拓平和記念館見学>

*寺沢秀文専務理事のお話

*館内見学 *語り部のお話

E神温泉着 夕方

3月8日(土) 昼神温泉発 専用車 <下伊那周辺見学>

*長岳寺(中国残留孤児の帰国に ・ 生涯を捧げた故山本住職のお

寺訪問と慰霊碑見学

松川 IC 着 <増野開拓地見学>

*戦後、入植してリンゴ園を開拓した農家を見学 *ワイナリー見学

と試飲

松川IC発 帰路、新宿へ

首都高速新宿 IC

新宿駅西口着 20時頃 到着後、解散

定員 35名 (最少催行人員 15名)

費用 29,800円

申込締切 2014年2月14日 (金)

企画:方正友好交流の会 協賛:日中科学技術文化センター

申込先:㈱富士国際旅行社 <u>TEL:03-3357-3377</u> FAX:03-3357-3317

saisu@fits-tyo.com 担当:西須・谷藤



久保孝雄氏の新著「変わる世界、変われるか日本」を推奨!

──右傾化を厳しく批判し、旗幟鮮明に掲げる「日中友好」── 理事長 **凌旱光**

神奈川県元副知事、神奈川県日本中国友好協会名誉会長の久保孝雄氏は、今年7月、新書「変わる世界、変われるか日本」を上梓された。日中関係が悪化し、その修復が問われている昨今において、できるだけ多くの人に読んでもらいたい一冊である。

久保孝雄氏は私と同年代の84歳、戦中戦後を体験した生き証人である。人間としての久保氏に最も感銘を受けたのは、少年時代、「おいチャンコロ、早くシナへ帰れ」と苛められる中国少年M君に同情し、上級生や同級生に殴りかかったという彼の経歴である。私も小学校の頃、よく「シナ人、チャンコロ」と苛められたが、久保氏のように勇敢で正義感の強い日本人少年には出会わなかった。

戦時中は久保氏も軍国少年であったが、二人の兄と叔父を中国戦線で亡くしたことから、敗戦とともにこの戦争は何のためであったかを深く考えるようになった。東京外語大の中国語科を卒業後は、日中友好活動に一生を捧げてきた。彼は中国べったりではなく、文化大革命には批判的姿勢を見せてきたという真の知中派有識者である。

その久保氏が憤りを持って批判するのは、当今 の日本において「日中友好」という言葉を忌み嫌 うアブノーマルな社会風潮である。書店には「反 中、嫌中、侮中のトンデモ本」「『中国崩壊論』の ほか、中国が『ならず者国家』で独裁、野蛮、好 戦の『悪の帝国』と言わんばかりの本がずらりと 並んでいる」(45ページ)。更に「日中関係を重 視する政治家や団体、個人に対し『拝中』『媚中』 などのレッテルを貼って反感を煽る風潮」(46ペ ージ)、「中国を褒めたり、日中友好を説いたりす るのがはばかれる雰囲気」、「新聞やTVの中国報 道でも必ず一言、二言の『中国臭し』の文言が入 っている」マスメディアの偏向などに憤慨し、こ れはまるで「『暴支膺懲』(暴虐なる支那を懲らし める) が高唱されていた戦時中に流れていた空気 に似たものが感じられる」(172ページ)と氏は 厳しく批判する。

では、なぜこのような反中嫌中の風潮が出てき

たのであろうか。「明治いらい 150 年間、とりわけ昭和の軍国主義時代、国民の意識に刷り込まれてきた『一格下の粗野な後進国・中国(昔は支那と言った)』が、1979 年以来の改革・開放により、一転して大躍進を遂げ、政治、経済、外交などの面で国際社会での存在感を一挙に高め、日本を凌駕する勢いを示すにつれて優越感が崩れ、その反動としての反発、強がり、腹いせなどが中国バッシングの風潮を生み、日本社会の閉塞状況もそれに拍車をかけている」(173 ページ)と見る。誠に的を射た分析である。

日本のこのような現状は、世界情勢の変化、国際政治の地殻変動を見ていないからだと氏は警告を発する。世界は今や「『米欧中心の時代』から『中国を中心とするアジアの時代』への転換期」にあり、これは「世界史の趨勢」(30ページ)である。「日本国民と日本国の平和と安全を保障する最大の条件の一つは、隣国・中国と敵対したり、崩壊を願望したりするのではなく、両国間に平等互恵の健全で良好な関係を築き、発展させていくことである」(176ページ)と説く。

日本で中国脅威論が喧伝されているが、「中国は米中時代(2G)を否定し、多極協調型世界を志向」している(58ページ)、つまり現在は「一極から無極へ、そして多極協調へ」進む過程にあり、日本は「ポストアメリカの世界に向け国家戦略の大転換を図れ」(49ページ)と主張する。

そして、今年6月に行われた米中首脳会談は「正に1972年のニクソンショックに次ぐ、オバマショックと言える」(4-5ページ)、「米中両国は冷戦や熱戦を回避することを目指し、協力と協調を基調とする新しい大国間関係を築いていくことで合意した」(4ページ)「21世紀の門出での10年が、ブッシュの『テロとの戦い』によって血塗られたものになってしまったのに対し、オバマ・習の歴史的な握手は、平和と安定の21世紀への新たな門出を告げるものになる可能性を生み出した」、日本の「安直な中国包囲網戦略や偏狭な『価値観外交』は、世界の大潮流からますます浮き上がりつつある」(176ページ)と日本外交

を厳しく批判する。

久保氏は日米安保条約にすがろうとする保守派に対して、今年の1月時点で「これからも世界の各地、各分野で米中の競争、衝突が激化するであろうが、両国の国家戦略からみる限り、武力衝突は起こりえない。米中戦争も日中開戦も夢想に過ぎない。日本の保守系タカ派のようにアメリカのタカ派の意向に過度に同調して中国牽制の先兵役を演じていると、やがてアメリカ発の『ショック』を受ける日が来るかもしれない」(220ページ)と警告を発していたが、6月のオバマ・習近平会談でその予言は的中した。

そして久保氏は日本外交の戦略的転換を図るために次の四大課題(自主外交の確立、アメリカ・タカ派の影響排除、歴史認識の清算、優越感の克服)を提起している。

- ①「日本の国益(中国経済との連携なしに日本経済の成長、発展はない)に沿った自主外交としての対中政策を進めるには、対米自立を強めることが不可欠である。」
- ②「日本がアメリカ・タカ派に同調して対中包 囲策の尖兵役を演じていると、梯子を外されるだ ろう。アメリカはすでに日米関係より、米中関係 重視に転換している。」
- ③「侵略の歴史を否定せず」、「歴史認識の共有化に努めると共に、中国へのリアルな現状認識なしに中国と向き合うことは出来ない。アメリカは歴史認識では中国に近い。「戦争責任をあいまいにし、歴史の清算を怠ったまま戦後60年を過ごしてきた大きなツケが、21世紀の国際社会で日本の占めるべき位置を不安定にしている。」
- ④「明治いらい国民に刷り込まれてきた対中優越意識を払拭し」、「中国が強くなっていることを率直に認め、優越意識、反中・嫌中意識を克服しつつ戦略的互恵関係を充実していくこと」。(27-28ページ)

更に久保氏は「日中友好に戻り、東アジア共同体を構築することが日本の生きる道」であると未来への方向性を指し示す。「アジアとの共生でとくに重要なのは『東アジア共同体』さらに『アジア共同体』の構築を目指すことであるが、そのためには日中韓の歴史的和解と真実の連携が不可欠である」(31ページ)と説く。その理由としては「国際社会で急速に存在感を低下させてしまった日本は、すでに独自で一極を維持する力を失って

きている。中国、韓国や東南アジア諸国連合との連携でアジア極(アジア共同体など)を形成し、その中で経済力、技術力の優位性を生かしつつ、存在感を確保していくことしかない」(73ページ)からだとする。

本来、日本はこのような戦略的転換をもっと早 くやるべきであったが、それが遅々として進まな かった背景として、久保氏は「日本の政治的劣化」 を強く指摘する。「安保、外交面で日本の命綱だ と考えてきた日米同盟が揺らぎはじめ、アメリカ のアジア戦略が日米基軸から米中機軸へ大きく転 換しつつある。」(48ページ)にも拘らず、日本 は対米追随を維持し、「日本の衰退を加速化して いる」のは、「日本の支配層(マスメディアも含む) は、アメリカの目でものを見、アメリカの立場で ものを考えることが、専ら国益を護る道と考えて 世界認識も時代認識も共に視野狭窄に陥り、自分 の眼で世界を見、自分の頭で時代を読む力が著し く弱体化している」(26ページ)からだと説く。 と同時に、「『脱米入亜』の戦略転換を図るべきと ころ、この歴史的課題から逃避し、対米追随とい う最も安易な道を選んでしまった」(26ページ) と日本の政治家のだらしなさを指摘する。

では、このような日本を再生させるにはどうしたらよいか。久保氏は、新情勢下での日中友好運動を盛り上げるべきだと熱く説く。「日中友好運動に従事してきた人は高齢化し、引退していくが、より幅広い人たちで担われていく」「理屈抜きで中国が大好きな人たち、中国の歴史、文化、自然が大好きな人たち、重要な隣国なので友好関係が大切だと考える人たち、中国とのビジネスで活路を開きたいと考える人たちが大勢いる」と励ます。そして自らの経験に基づき、「ネットを活用した若者を対象とした『チャイ華』というボランティア組織、『中国ビジネス相談室』など新しい組織作りとその拡大」を図るよう提言している。(179ページ)

日中関係は今、国交正常化以来の最悪状態にある。日中両国の国民と有識者は日中友好の大切さを再認識し、新方式の日中友好運動を巻き起こさなくてはならない。久保氏の本著作は正にその糧を提供するものである。是非とも日中双方の幅広い読者が一読されることを心から願って止まない。

2013年9月5日

私たち「芳芷友好交流の会」の活動によって、ハルビン市郊外の方正県にある日本人公墓の存在が少なからず人々に知れ渡ってきた。しかしこの会が、前身

の「ハルビン市方正地区支援交流の会」(以下、 支援の会) の後を受けて発足した 2005 年当 時は、まるで知る人は少なかった。

例えば、10 人ほどの中国通の集まりの時、私たちが出版したばかりの『風雪に耐えた日本人公墓一ハルビン市方正県物語』を PR し「方正県に日本人公墓があるのをご存じですか」と問うと誰も知らなかった。その中に北京駐在経験の新聞記者が3人もいたにもかかわらず、である。

中国政府もことさら宣伝めいて日本人公墓の存在を知らせることもなかった。おのずとその存在を知っていたのは旧満洲に開拓民として入った一部の人、日中友好運動に古くから携わっていた人たちのほんの一部の人だけだったのではないだろうか。

詳しい経緯を省くが、「支援の会」の末端 にいた私が初めて方正県の日本人公墓を訪 れたのは 1993 年の時だった。そこには二 つの公墓が建立されていた。(写真右)

正面に向かって右側に立つのが「方正地区日本人公墓」である。1945年8月9日のソ連参戦、8月15日の日本敗戦は、開拓民たちの環境を大きく変えた。ソ連兵たちの襲撃を避けるために開拓民たちの必死の逃亡が始まった。今まで微笑みで接した中国人たちが険しい顔をして襲ってきた。

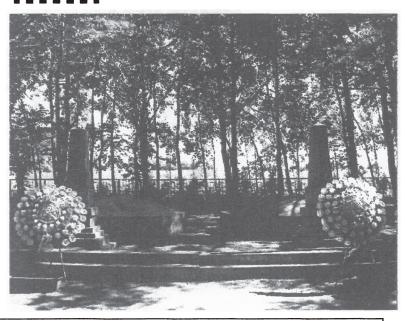
ソ連との国境沿いにいた多くの開拓民たちは、ハルビンまでたどり着けばなんとか

日本に帰れると思っていた。ハルビンは遠いが、その途中にある方正に行けば、なんとか生き延びることができる。方正は関東軍の食糧基地としても知ら

れていた。時には幼子を捨て、あるいは絞殺し、人々は方正にたどり着いた。しかし関東軍はすでにいなかった。飢餓と伝染病が人々を襲った。そうして5000人近い人々が亡くなった。すでに方正地区では人民政府が成立していた。1946年春になると凍っていた死体は溶けはじめ腐乱してきた。人民政府はその死体を3日3晩かけてガソリンを放って焼いた。そうして方正県の砲台山に埋めた。

その白骨の山を 1963 年、残留婦人の松田 ちゑさんが再び見つけた。それ以前の 1948 年、松田さんが砲台山に入った時、その白骨の山を見つけたが、ただ草花を捧げ、南無阿弥陀仏を何回か唱えることしかできなかった。しかし今度は違った。松田さんはなんとか自分たちで埋葬できないものかと思ったのである。公墓建立はこんな経緯から始まった。(続く)

. 方正友好交流の会事務局長・刀正日本人公墓とは何か



・わんりぃ'6月号「中国城市めぐり(25)・紹興市そのII」(・わんりぃ'HP/・わんりぃ'会員達のエッセイ http://wanli-san.com/teranishi/title.html)で、筆者の寺西英俊さんは、文の最後で「方正地区日本人公墓」に触れている。関心を持たれた方もいらっしゃるのではないでしょうか。毎月発行の ・わんりぃ'をお送りしている日中友好協会機関紙「日本と中国」の元編集長・大類善啓氏が、この「方正地区日本人公墓」の紹介活動を続けている「方正友好交流の会」事務局長を務めていらっしゃり、日本人公墓の存在を知りました。

日中友好の礎として、この公墓の存在意義を感じ、一人でも多くの方に知って頂きたく、大類氏にお願いし、 特別に 'わんりぃ' のために「公墓」と「方正友好交流の会」について3回シリーズで寄稿頂きます。(田井) 松田ちゑさんは、人民政府を訪ねた。散乱した日本人の遺骨の状況を話し、なんとか自分たちで埋葬したい旨、許可を願い出た。ほとんどが「開拓民」た

ちの遺骨とはいえ、中国から見れば、侵略のお先棒をかついだ人たちの白骨である。まだ侵略の傷跡が癒えていない1963年、県政府は「侵略者の骨など埋葬する必要はない!」と一蹴してもおかしくはない状況である。

しかし県政府はそうはしなかった。日本 人の散乱した骨をどう処理していいか、残 留日本人の願いにどう対処すればいいか、 彼らは上部の黒竜江省政府に相談した。省 政府もこの問題を簡単に片づけることな く、中央政府に判断を仰いだ。

仮に、江沢民が主席の時代だったらどう 県政府や省政府は処理しただろうか。ある いは現下のような日中両政府が良好でない 状況だったらどうだろうか。

松田ちゑさん自身が県政府に埋葬許可を

願い出たろうか。県政府 や省政府が松田さんの願いを考慮しただろうか。 歴史に「もしもあの時」という設定には意味がない という。しかし、どうしてもそう考えたくなってしまうのである。

日本の敗戦後、全中国は国民党と共産党との熾烈な内戦状態になった。 毛沢東や朱徳、周恩来の威光などがまだ轟いていない時代である。当時の在日華僑などは、アメリカ軍の後押しを受けて国民党が

勝利するだろうと睨んでいた。しかし結果は違った。 中国共産党は旧満洲、東北を重要拠点と重視して全勢 力を注ぎ込み、国民党を打ち破って東北地方で最初の 人民政府を打ち立てた。

力正友好交流の会事

本

公

は

何

当時の中国共産党は国際主義的精神が横溢していた。周恩来は中国人民に対して常に、「日本の軍国主

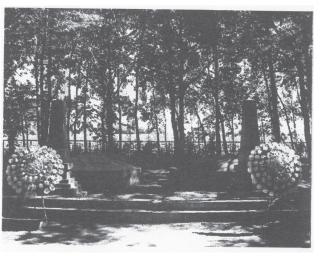
義者と日本人民を区別せよ。日本人民も軍 国主義の犠牲者である」と説いた。

「満洲国」時代には、日本からも各宗派の僧侶がやってきた。当然のごとく、日本人が死ねば、「満洲国」にある浄土真宗なら浄土真宗のお墓に埋葬された。当時、たくさんの日本人のお墓があったはずである。中国を侵略した日本が敗戦を迎えると、たちまち傀儡国家だった「満洲国」は崩壊した。当然のごとく、多くの日本人の墓地は一掃され、公園になったりした。

最近、ハルビンに「おキクさんの墓」があるそうだ。ぜひ参拝したいがわかるだろうかと山陽地方から私の所に来た人がいた。おキクさんは、いわばからゆきさんとして満洲へ渡り、関東軍の諜報活動に携わり日本国家に「貢献した」ようである。そのおキクさん

が死んだ時、日本支配下 にあった朝鮮の新聞が彼 女の死を悼んだという。

そんなおキクさんの記事を目にした年配の男性は、墓がなくても、そのませいでもわかれば詣ぶい日本人のおきはからのおりませいである。 大部 はいではいい での墓地はいま がいま での墓地はいま 遊園 地にいま がった にん での墓地はいま 遊園地に



方正に立つ二つの日本人公墓 「方正地区日本人公募」(右)と「麻山地区日本人公募」

麻山地区日本人公募」は、避難の途中、ソ連軍に攻撃され、麻山地区で集団自決に追い込まれた、500人余りの開拓民を葬った墓で、方正地区の日本人公墓が建てられた20年ほど後に造られた。

なっているという。

方正にある日本人公墓は、文字通り、中国で唯一の日本人公墓なのである。

「方正地区日本人公墓」と刻んである公墓の左隣に 「麻山地区日本人公墓」がある。麻山は現在、黒竜江省 鶏西市麻山区、省の東寄りロシアに近い所である。

1945年8月12日、ソ連軍に攻撃された哈達河開拓団

は絶望的な状況にあった。このままでは婦女 子たちがソ連軍の凌辱に遭う。身近に迫った 危機に、420名ほどの婦女子は団長とともに 自決の道を選んだ。

麻山で散った女性たちの遺骨は野ざらしに なっていた。戦後、遺族たちはなんとか遺骨を 収集し慰霊したいと思っていた。遺族たちが 哈達河会を結成し、1982年初めて鶏西市を 訪れた。その時は大雨が続き、麻山に行かれず、 翌年再度訪問し麻山を訪れたが、写真撮影も 慰霊行事も許可されなかった。散乱する遺骨 を前に再度、遺族たちは涙を呑んで帰国した。

その後、金丸千尋さん(方正友好交流の会 顧問。敗戦後、人民解放軍に入り、ずっと日中 友好運動に取り組んできた) らの努力によっ て遺骨収集が実現し、1984年中国政府はこ の地に公墓を建立してくれた。それが麻山地 区日本人公墓である。

この二つの公墓から数メート ル離れた所に「中国養父母公墓」 が立っている。"残留孤児"とし て育った遠藤勇さんは中国名[劉 長河!として育ち、ハルビンでロ シア語教師として生活していた が、おぼろげながらも両親の顔 を思い、やっと実父の所在を確認 し、文通を始め帰国申請した。し かし文革で挫折。日中国交回復 後、帰国が実現、実父のいる岩手 県岩泉町で過ごし、その後貿易会 社を興し成功した。遠藤さんは自 分が育った方正県を忘れず、中国 人養父母を常に思い、欠かさず中 国へ仕送りをしていた。

その養父が亡くなった後、遠藤 さんは中国にいる日本人孤児た ちを育てた養父母たちの安住の 地を作ろうと養父母公墓建立を 思い立った。当時の中国では墓地 を持てる人も少なく、遠藤さんは養父母たちへの報恩の 気持ちを墓所建設にと思い中国側と交渉したが難航し た。しかし「養父母たちへの報恩の気持」が中国側を納得 させた。1995年8月「中国養父母公墓」の除幕式が行わ

れ、遠藤さんは養母・呂桂雲と共に参列した。

この中国養父母公墓からまた数メートル 離れたところに2004年9月、「藤原長作紀 念碑」が立った。藤原さんは1912年12月、 岩手県沢内村で生まれた。「米作り日本一」 として仰がれるほどの人だったが、減反政策 で自ら作り出した水稲栽培技術が日本では 不要になってきた。

中国の寒冷地でこそ藤原式稲作方法が役 立つと1980年初訪中。そして翌年から方正 県で実践、多大な成果を収めて東北全土から 中国全土に藤原式稲作法が拡大した。故・岡 崎嘉平太さんは、「中国に対する賠償に代わ る大事業を成した」と称賛するほどの大仕事 だった。

筆者自身2008年夏ハルビンで、王英春さ ん(当時、黒竜江省外事弁公室副主任)から「東 北三省の人間は誰もが藤原さんの名前を知っ

> ている。おいしい白米が食べられ るのは本当に藤原さんのお蔭だ」 と聞いた時には、やはりそうかと 改めて藤原さんの業績を実感し たものだった。

> 友好の深い心をあらわすこの ような石碑を囲んで中日友好園 林がある。そこに方正日本人公墓 が立っている。

(このシリーズは終わります)

公墓とは

何か

万正友好交流の会事務局





藤原長作紀念碑

正友好交流の会

公墓の存在をより多くの人たちに 伝えるべく、ぜひ会にご参加を!

101-0052 千代田区神田小川町 3-6

- (社) 日中科学技術センター内
 - **2** 03-3295-0411

E-mail:ohrui@jcst.or.jp

個人会員会費 一口 1000円 (口数は最低一口、上限なし) 郵便振替□座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会

方正日本人公墓が私たちに問いかけるもの

――「方正友好交流の会」へのお誘い――

1945年の夏、ソ連参戦と続く日本の敗戦は、旧満洲の開拓団の人々を奈落の底に突き落としました。人々は難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々が方正の地で息絶えました。それから数年後、累々たる白骨の山を見た残留婦人がなんとかして埋葬したいという思いは、県政府から省政府を経て中央へ、そして周恩来総理のもとまでいき、中国政府よって「方正地区日本人公墓」が建立されました。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない1963年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれたのです。日本人開拓民たちのおよそ4500人が祀られているこの公墓は、中国広しといえどもこの方正にあるものだけです。(黒龍江省麻山地区でソ連軍の攻撃に遭い、400数十名が集団自決した麻山事件の被害者たちの公墓も1984年に建立され、この方正の地にあります)

この公墓の存在は、私たちの活動もあり徐々にではありますが、人々に知られるようになりました。民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって管理維持されている公墓の存在を、更に多くの人々に知ってもらおう。「愛国主義」ではなく国際的な友愛精神を、さらに「国際主義」的な精神を超えて人類愛的な精神を広めていこう、と活動しているのが「方正友好交流の会」です。当会の前身は1993年に設立され、2005年6月に再発足し、日中友好の原点の地ともいうべき「方正」に光を当てたいと活動しております。

個人会員 一口 1,000円 団体・法人会員 一口 10,000円 (口数は最低一口、上限はありません)

方正友好交流の会

101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6 (社) 日中科学技術文化センター内 電話 03-3295-0411 FAX 03-3295-0400 E-mail: ohrui@jcst.or.jp 郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会

HP アドレス: http://www.houmasa.com/

書籍案内

* 『東京満蒙開拓団』

東京の満蒙開拓団を知る会・著

満蒙開拓団というと長野県や山形県などの農村からが多いということもあり、東京人には関係ないように思われがちだ。ところが東京からも満蒙開拓団があった。本書は、空白になっていた東京からの開拓団を追った本格的な研究書だ。日本全体で、満蒙開拓団と満蒙開拓青少年義勇軍合わせて約32万人が「満洲」へ渡ったが、そのうち、約1万1千人余りが東京から行ったという。2007年から5年をかけて調査研究を重ねての成果がここにある。加藤聖文氏の「満蒙開拓団の歴史的背景」というわかりやすい解説が巻末にある。

(定価:1800円+税別、著者:今井英男、多田鉄男、藤村妙子。

発行: ゆまに書房 101-0047 東京都千代田区内神田 2-7-6

電話:03-5296-0491 FAX:03-5296-0493)

*『渡満とは何だったのか――東京都満州開拓民の記録―』

高橋 健男 編著

大著『新潟県満州開拓史』をまとめた編著者が、新潟県庁で発見した「東京都送出単独 開拓団資料」などに開拓団の手記やインタビューを加えて、東京都が送り出した満州開拓団 の入植から引き揚げ、そして戦後の再入植の顛末を詳細に記した。発掘した全資料がそのま ま本書に収録されている。

「東京都送出単独開拓団資料」は 1957 年に東京都が編纂したが、編著者によると、東京都では資料は見られず、その資料の編纂の事実も忘れられているという。編著者は、新潟県に送られた4分冊を発見、東京都満州開拓民の戦後も記した貴重な書だ。

2014年2月発行予定。

(定価:1800円+税別、発行:ゆまに書房 101-0047 東京都千代田区内神田 2-7-6 電話:03-5296-0491 FAX:03-5296-0493)

*『戦場へ征く、戦場から還る―火野葦平、石川達三、榊山潤の描いた兵士』

かごしま たけし 神子島 健 著

サブタイトルに登場する3人の作家たちが、日中戦争、十五年戦争に動員された兵士たちを描いた小説の分析を通して、兵隊になり、戦場に征くこと、そして還ってくることの意味と、そこにいる兵士たちの心の揺らぎなどを考察した500頁を超える大著だ。

戦争を知らない世代が圧倒的に増えている現在、現実の戦争はどのようなものだったのか、 本書を読めば痛切にわかるだろう。

著者は東京大学大学院国際社会科学専攻の助手、気鋭の社会学者だ。昨年、本会が東大駒場で行った総会記念講演会ではいろいろ協力していただいた方でもある。

(定価:5460円。発行:新曜社 101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10

電話:03-3264-4973 FAX:03-3239-2958)

ありがとうございました

前号の会報 16 号入稿後、2013 年 5 月 7 日以降からカンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を以下に記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。(敬称略、受付けた順に記載しました。2013 年 12 月 3 日現在)

新田充 寺本康俊 成田晃一 青木孝 佐藤貞雄 飯田成夫 岩噌弘三 砂原恵 原田清治 牧野史敬 小岩盛廣 阿久津国秀 秋葉二郎 篠田欽次 小出公司 山岡紀代子柳瀬恒範 芹沢昇雄 南雲英雄 大西広 山内良子 前田光繁 中井韶太郎 菅原三太郎 丹保洋子 甘利真実 城谷稔 竹井成範 矢吹晋 山川梅子 金倉美佐恵 高木凉子 桜井博之 佐藤喜作 杉田春恵 及川康年 石田和久 田中深雪 池田六美 中島紀子 篠原淳子 NPO 法人やまなみ 手塚登士雄 貞平浩 魚崎宏 山田寿子 堀江はつ 篠原国雄 櫻庭ゆみ子 白西紳一郎 寺沢秀文 末広一郎 佐藤正之 山田弘子 立岩眞理子遠藤勇 鈴木敏夫 長谷川照夫 伊藤幸枝 鵜沢弘 田村正篤 望月信隆 園木宏志 長塚淑江 名井佳子 久保孝雄 西美津子 下山田誠子 穂苅甲子男 塩見雅正 矢野光雄鈴木幸子 中村静枝 水野正昭 福島国夫 坂田和子 小関光二 生田和美 新田百合子高橋健男 由井格 藤村光子 宮原咸太郎・恵子 瀧亀久男 今村隆一 木戸冨美江 山下美子 竹田絢子 福久一枝 矢部竜夫 百崎進 鳥島せい子 新谷陽子 飯牟礼一臣小畑正子 石田武夫 吉安蓉子 馬場永子 名取敬和 川内カチエ 野澤淑子 常住三千代 金子彰 馬場信韶 黒岩満喜 風間成孔 大島満吉 石井敏夫 岩永法子 青柳幸司山田嘉彦 肥後茂樹

≪編集後記≫

作家の辻井喬さんが亡くなった。畏友、木村知義さんが NHK 在職中の 07 年 8 月に企画し放送されたラジオ特別番組『2 1 世紀日本の自画像一変わる世界! 日中関係、新たなステージへの構想』で、方正日本人公墓を取り上げられた。ゲスト出演が辻井さんだった。放送後辻井さんに『星火方正』をお送りしたところ、返事がきた。「民間交流が大切だ。頑張ってください」と記されていた。その数年後、ある会合でお会いしご挨拶したところ「なかなか立派な会報ですね」という言葉をいただき恐縮した。

丹羽宇一郎さんからもらった手紙の中に、「"継続は力"だとつくづく思います」という言葉があった。今号は17号である。会員読者の方々の支援があってこそ本誌も発行できる。有難いことである。戦争を知らない人々が増えている。歴史はちゃんと伝えていかなければいけない。本誌にふさわしいと思われる原稿を遠慮なくどんどん寄稿していただきたい。最後になったが、編集にはいつも森一彦さんの助力を受けている。とりわけ宮本雄二さんのテープ起こしにはお世話になったことを記しておきたい。(大類)

≪表紙写真 丹羽事務所提供≫

『星火方正〜燎原の火は方正から〜』(第17号) 2013 年 12月 14日発行 発行:方正友好交流の会 編集人:大類善啓 Email:ohrui@jcst.or.jp 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-6 日本分譲住宅会館 4 F (社)日中科学技術文化センター内 電話:03-3295-0411 FAX:03-3295-0400 郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会 HPアドレス:http://www.houmasa.com/